
詩集

喜ばしき草木

高島茂

詩集

喜ばしき草木

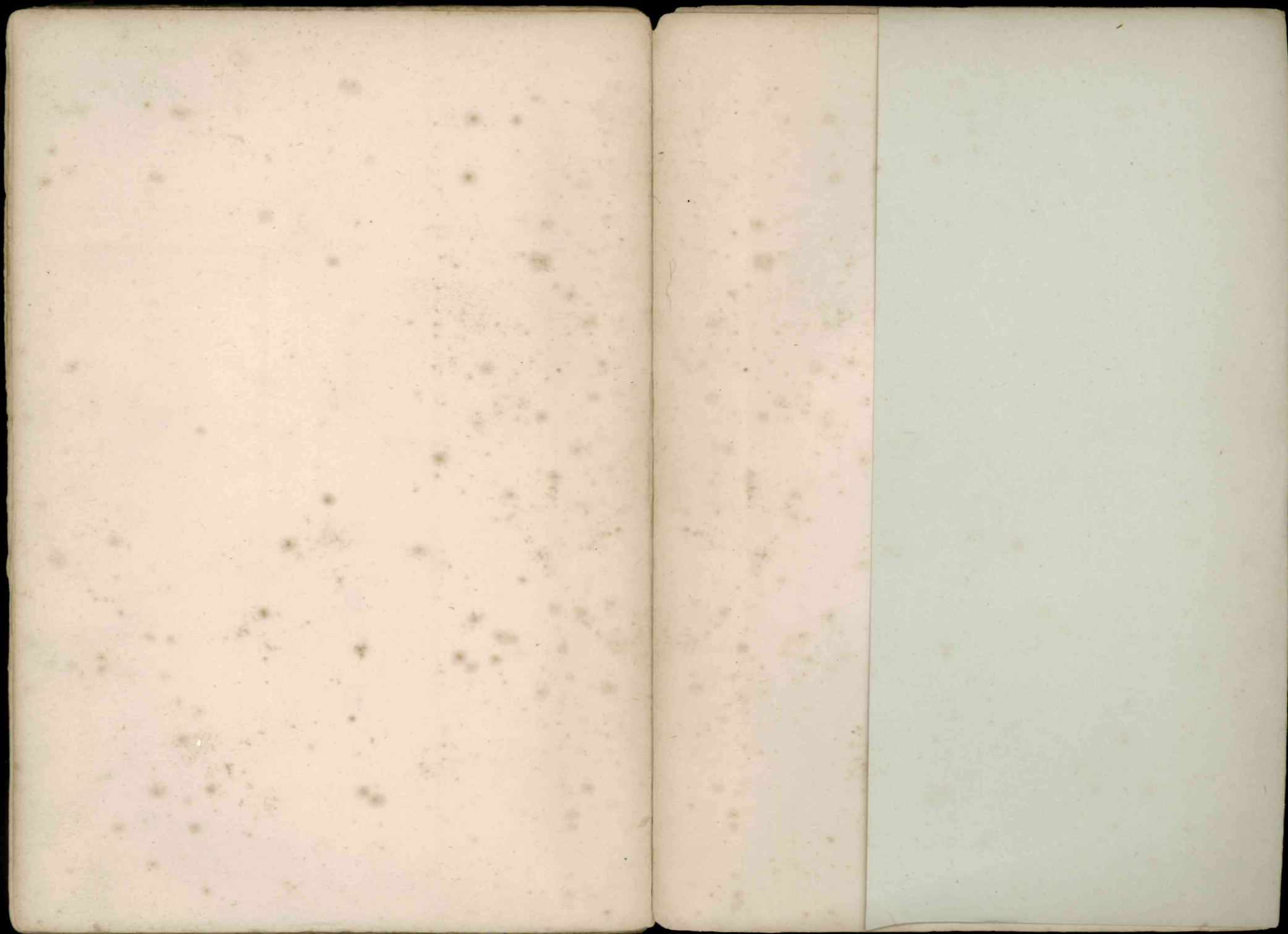
高島

集 詩

木草きしげ喜

茂 島 高

版 社 詩 情 杼



喜はしき草木

高島茂

序

茂・高島君は信濃の人、今澄澗とした若者である。君の詩を初めて見たのは、巢鴨の日本詩人編輯所で、三百篇あまりの中から他の二三篇と共に引き出してよんだときである。それまで甘い精巧な詩ばかり見てゐた僕には、高島君の詩には、夏草のやうな澄澗とした清新さがあつた。當時横内泰と言つてゐた君は、聞もなく高島茂となつて僕の嵐の同人になつた。

それから手紙と詩がひんびんと來た。それまで君はどう言ふ生活をして來たか知らないが、思ふに同君性は來外光的のよき心情の持主であつたに違ない。粗朴で一本氣な情熱の持主である。ホイットマン、ゲルハールン、千家や尾崎の影響とでも言ひたい

やうな、それにもまた強いリトムを打つ詩を書いた。殊に同君は、尾崎の「空と樹木」を極度に讚美してゐた。君は田園に於ける生活を、日常細事にいたるまで、強い人道的の精神で貫ぬかうとしてゐる。しかし君が力説し、讚美してゐる外に、天然の附屬的の美しくさがころげ出してゐる。其處がいいところである、試みに同君の詩を見給へ。その強いリトムと、一聯の長さの持つ長い凱旋歌にかけては一寸類がない。君には尾崎のもつ文明的なもの、莊重なもの、典雅なものに乏しいが、強い放射的のリズムがある。その激流的の表現にかけては彼獨特なものである。

君は四月になると、たうとうやつて來た。いがくり頭の、一眼で談ずるに、力と健康の快よさを感じさせる男である。尾崎と、陶山と、僕の所で遊んで、又矢のやうに、山へ歸つて行つた。そのわき目もふらない態度が如何にもいい。そして今年の夏は山

の湯にこもつて、一冊の詩集を持つてゐる。今、同時に四五冊分の詩集を持つてゐる。今、君はかぎりなく書けるときである。そのありあまるものを放射し切つての後の彼はおそろしい。同君は今の裡に歌ふべしである。年をとるとあれが出来なくなる。君は實に山の若者がもつ喇叭のやうに清朗である。私は君の處女詩集を心から祝し、現詩壇に紹介することを本當によろこんでゐる。

一九二二年九月

佐藤惣之助

自序

私の第一詩集「喜ばしき草木」一巻に收めた詩は、全部千九百二十三年二月以前の作である。私の不遇に終つた數年の學校生活の後、私は詩作に依つて新しい歡喜を知る事が出來た。愛する友や、田舎の美くしい自然の中で、此の作集を書き上げる間二年足らずの年月を私は實に悦ばしく生きて來た。しかし二年前の作は私の今日から見て満足出來るものでない。けれども私は之の集一巻を朗らかな碧空のやうに愛してゐる。そして私は尙ほ第二、第三の詩集を今後書くであらうが、そのために此の第一詩集への愛のうすれるやうなことは勿論ない。中には幼稚なもの、偏狹なもの、またブーアなものもあるだらう。けれども私は、私自身に就いて忠實に仕事して來た上の

事である。皆私の日常生活の経緯であり、眞摯な精神の探求であつた。私は詩をよくすることより、生活をよくすることに、より以上の注意と、懸念とを注いだものだ。生活こそ總べてにやがて輝やきある信念を持ち來たす可きであらうことを固く信じて其の道に依つたのであつた。かくした私の詩が流行に迎へられないことは私に取つて強い喜びである。そして眞實の讀者を得ることも出來ると信じてゐる。此の集を發行するについて内藤銀策氏の厚意を深く感謝する。そして佐藤惣之助兄、陶山篤太郎兄、それに私の同窓の友詩人堀内保兄及び、畫家田中重穂兄に心から感謝する。此の集の上梓される今日私は病弱の身となつて病院の一室に起臥する身となつてゐる。而し明るい四月、私は私自身のため、更に新しい仕事に取りかからねばならぬ。

大正十三年四月八日

信州上諏訪赤十字病院六病室十六號にて

高島茂

目次

1

なほ生き深めるために (二)

吾が友春雨の小供たち (四)

ボプラの立木 (三)

とんぼ (三)

夜空を讀ふ (言)

2

樹木を稱へる (四)

讚美の生活 (五)

二月の空 (六)

月 (六)

幸福を浴びて立つ (六)

3

春光 (八)

星を讚美す (八)

落日の空 (九)

田舎娘 (一〇)

雪を讚美す (一三)

4

なほ深い懐がれの田舎の風景へ (二四)

娘 (三)

燕 (三七)

落日の冬ぞら (二四)

此の朝の一と時 (二四)

冬の聲 (二五)

夕暮 (二五)

無題 (二六)

5

新大陸圖 (二六)

四月の花 花 (二八)

蒲公英 (二九)

雪の空 (三〇)

朝の訪れ (三一)

幸福を讃美す (三二)

〇

なほ生き深めるために

私はなほ生き深めるために田舎を愛さう。

健康なオゾンの厚い層が巨大な船のやうに、

横揺れ縦揺れ田舎の日中が大きく揺れる春だ。

あの清らかな水に棲む鑽石のやうな魚族でさへ、

青若葉のそよぐ田舎の爽かな大氣の海に、

實に潑刺と千萬年も生き延びられると思はれる位だ、

私はかかる日中、

これを讚め深めるに最もふさはしい散歩の時を

思はず長びかせて費すのだ。

おお それは何といふ思索以上の感興の時であらうH

大氣は下層から深い上層まで飽くまで澄み、

鮮やかな桃色の色素が春の大氣を化粧し、

まるで葡萄酒かパンのやうに豊醇な日中の、

撞はいままな饗餐を私は獨り享ける。

あの黄塵の舞まひ量かむ支那街のやうな巷街とは、

なんといふ懸け隔れた空氣の蒸溜地であらう。

私は自分の造形の意圖のため、

美の繼承のため、棲める世界の擴充のため、

私自身の確とした生涯の美しい青銅の像のため、
組織ある自己の造營を勵むのだ。

放縦な散策と思索の樹蔭！

鮮やかなリズムを打つ大自然の胸の燦とした、
緑の紋章の聳え立つ鍛錬の森、精神の要塞で、
萬物に向つて文化と熱情の風を起す、
心の奥底からの叫びを感じるのだ、
そしてそれを詩とする強い生産の誇を感じるのだ。

私は此の陽氣な散歩の道すがら、
又われながら思ひがけない詩想の波止場の岸で、

高大な精神の出帆を感じるとき、

天と海の荘大な合唱を作曲するのだ。

又杳か聳え立つアルプスの銀の會堂を見、

大雪塗の神祕の色を星のやうに感じ、

大道の花崗石のやうな立派な道で、

春の散歩は四圍に連れ立つであらう。

私は僅か數町、又は一里足らずの散策で、
もう春の酒場の田園に酔ひしれてしまふ、
そして今となつては、
私の重たい冬の忘れ形見である。

羽織をぬぐ。

それを肩にかけて額の汗を拭きながら、

竹林の爽かな春の隧道をくぐりぬけ、

時たま待ち伏せしてゐる樫竝木の、

高い堀割りの日蔭の道を通り越し、

野薔薇や、枳殻の圓い葉を、

ちらちらさせてゐる若葉の庭を通りぬけ、

石垣の上で、かきしもと葉の、

青いヨツトのおよぐ下、

村落の實に平和な讀經の音をききながら、

早足、竝足、思ふ存分の遊説を、

樹木から聞き、若葉から聞き、昆蟲から、

黄色い雛鳥から、盆栽の高山植物から聞き、

池ばたのひろびろとした葉むらの茂る熱帯植物から、

泉石の涼しい中、雑草の陳列場から、

新しい呼吸と一緒に吸ひ込むのだ。

後ろからや、又前からや、又突然横ちよから、

春風の小供等が私の肩を乗り越し、

亂髪の黒い髪をかき亂し、

紺がすりの羽織を引つたくる。

私は其處の伴侶であり、樂器であるものから、

湧き上る詩作の曲目を追ひながら、

春酎はな縁日の遠乗りをする。

袴さんちやくの上で澁茶の三尺をしつかり結び、

芳醇な日光に浸かることは無生の喜びだ。

私は疲れる、

清冽な小川の淵で、

野芹の白い根をわけて、一ぱいの水をのむ。

ああ そして口を拭く私は、

あの山禽の水を含んで胸毛をふるはす、

壮快な旋律だ。

ああ そして私の胸が熱湯のやうにふるふのだ。

ああ この胸毛、胸をひらかう！

野の甘露に生命から濡れよう。

私は水邊を立ち去らない、

水際の芹が水の舷ふたせりにふれ合つて、

實に小さな水邊の青い村落の美しさだ。

私は其の地點から遠くを見渡す。

道道の風景が全幅の視野となつて、

水ぎはに立つ私を、

大洋の岸邊に立つた時のやうに揺り上げる。

青青と空を指す二三寸の夢！

がつしりした葉叢の優るキヤベツの森！

竝びすくんでゐる小鳥のやうに見える莓の畦！

其處に私は私の血を湧かす生活の熱望に、

實に匹敵する彼等の勢ひを感じる。

私は其處に悠然と、

日光の草原の大海原を抱いてゐる。

この下層の大氣の中を、

大船に乗り込んでゐるやうに、

又私のすばやい眼光が其處から無數に放たれる軍書鳩のやうに、

又電報のやうに信號のやうに、シグナルのやうに、

自由にゆつくりと遊び漕ぎ廻るボートのやうに、

水甕のまんまんと充ちる精神の血管を躍らせて、

馳せ出す全熱情を四圍に放つのだ。

すぐ前の小川の上で羽虫のダンスを見る奴や、

思ひ切つて胸を空に向ける一氣の弾丸のやうな奴や、

畑に働く田舎娘に強い愛を感じたり、

野に放たれた可憐な牝牛を愛撫する奴や、

遠い地平杳かな我がすみ家を探す奴や、

こんもりと茂る川端の蕨のかたまりから、

かはらひわや百舌鳥の友達となつて遊ぶ奴や、

又は私の故い家に居残つて、
新しい驚異である幾多のものと、
早鐘を打つて波うつやうに心の電波を、
一つ一つ吟味して私の最も深い眞實の殿堂に、
實に正しく迅速に傳令する奴や、
その殿堂に腫を燃やして立つ明敏な筆稿に、
眞實の記載を果させるのだ。

おお かくて私の今日の歡喜は、
一つの實に無量な高貴な鑛脈を發見したやうに、
なほ深く深く奥へ奥へと浸入して、

求め探すのだ。
かくて其の周圍に
無雜作に掘り出された數數の鑛石の輝き！
その天然の儘なる鑛石の夫夫を、
歡喜しつつ私は磨く逞ましい人生の、
獨り喜悅し愛撫しつつ作り上げる彫刻家なのだ。

吾が友春雨の小供たち

凶寒と凍結の冬の會堂の閉塞のあと、

試練と親和の銀の祭壇に次いで、

絢爛な春の音樂堂の開かれる緑の植物園の前で、

華やかな花壇に建てられる春の祭壇で、

お前三月なかばの春雨の小供たち、

ヨツトのやうな快活な少年が、

地球の暖流に乗つて陸續と來る。

おお その壯快な湮序樂の宮廷樂師たちの出演よ！

お前たちの實に健全な大序樂で、

地球を振盪し春を輝やかしい太陽として呉れ、

久しくも私のペンは、

熱烈と讚美のこもる作曲を待つたことか！！

君たちの花花しい巡歴が、

銀河のやうに地球の眞上に廻るとき、

オリオン座の星が春の化粧の夜に、

南と北に杳かな神祕の光を放つとき、

南の國ではいち速く日本娘の櫻を笑はせ、

素朴な草の百姓女の褐色の古い冬着を捨てさせ、

清らかな春着に草色の青い薄着をつけ、
うろついてゐる道端の冬の怪我人の雑草の男達に、

明快な日光色の水薬の光を飲ませ、

まるで茅屋のやうな冬の自然を、

新鮮な草色木綿の大厦高樓の新都市とし、

地上は緑の會堂の立ち竝ぶ新開地となり、

空中に樹木の清純な青い枝の旗を立て、

其の先に日の丸のやうな蕾の燈火をつけ、

満ち潮のやうに大きく鮮やかに、

樹木が明快な蕾で新星座となり、

かくて地球を祭り日の快活な小娘とする。

おお 甘美な空と、健全な樹木と、豊潤な地！
神の傑作になる宇宙の三部曲よ。

春は廣大な川となつて心を清め、高くして呉れる。

私はなほも生き深めるために、

大小一切の渦巻く思念の輪を懸けて

お前の讚嘆を一切の生活に向つて朗讀したいのだ。

君こそ夜の太陽、曇り日の光線だ！

そして星の娘の簪のやうに永遠な感じがひそみ、

私は地上の幾萬の乙女に清められてゐるやう、

眞に涙ぐましい訪づれなのだ。

君たちの若い力の肺臓が、

皆んな地上の自然物の精となつて宿るかと思ひ、

一切の私的な生活を亡ぼし、己れを空しくし、

悲壯な美のこもる何物かに姿をかへ、

此の世をもつと善き精神の種族にしたいのだ。

おお 元氣のいい晴天の小供たちよ！

今空はくもつてゐるのだが、

お前たちの故里は鏡のやうに晴れてゐるのだ。

生生とした希望を私に起さしてくれ

至純な魂と清い信仰が君等のものだ。

そして私達の不變の讚美でもあるのだ。

實に君は春を光明の海洋とする天水の精だ！

春の女神の黄金きんの如露から、

光明のつぶてとなつて降る活潑な小供らよ。

私はなほ此處で奔放な音綴を連ねるのだ。

立木は沐浴する鮮魚か、とびの魚か！

蕾の頸飾をつけた若い奥様、

おお 春が今之等の裡に生き榮えるのだ。

私は此の名匠のアトリエの天然の工場を、

彼等の一切の創見になる仕事場の、

名匠の傑作を、仕事を、熱意を、

讃め稱へ、感じ熱し、散歩の友となつて、

君等の信念を、精力を、設計を、力をどんなにか讃仰し、

又自分の未來をどんなに壯大に想見する事か！

君等の工場は今雨の小供の入り込みで多忙を極め、

お互に働らぎ、勵まし合ひ、

青い草の汽笛を鳴らし、

赤い蕾のひそやかな植物園の高燈籠を、

樹樹の家族の戸口につるし、

廣い野天には草色の薙を展べ、

小川の娘には何時もより清朗な歌を唄はせ、

村落の間を色どる地圖の田舎小徑も、

濱の眞砂のやうに奇麗な小石の青玉やルビー、

そして村村は鮮魚の踊りををどる。

小供等よ、もつと蕾に色をおつけ、

薙をもつと廣く敷き展べてくれ、

小川の娘にもつと大氣の色をうつしておやり、

草花の祭りの娘に透明な色や香を持たしおやり、

大氣と地球の接吻に感激の光を流しておやり、

そして私と其等との固い婚姻の盃に、

清い結合の一滴を落して呉れ！

私は其等の情熱を火のやうに感じ、

鐵の格子のやうにがつしりと私の精神と組み固め、

春の生活を囚人のやうに呑氣にし、

又、不思議に明るい祭りとする。

おお 春の素晴らしい工場よ

樹木の煙突よ、流れの汽鐘よ、

小川の汽笛よ、雨の美術家よ、小鳥の工女よ、

春風の技師よ、大道のリボンよ、

その咲き満ちた花花の雑沓の巷よ！

私は此等の海嘯のやうな熱情の國土で、

君の仕事を、精神を、星のやうに清く感じ、

又 透明な神祕の色に噛み、祝禱し、

さて、私の仕事のペンを握り、

全熱情の緊密な焼き板となる、

君等の使命と最善を飾る、

地盤に比類する、

憧憬と正義の誘惑とを併せ持つ原稿紙に、

Gペンの鋭利な尖端を楯つき、

魂の索引をそれに感じつつ、

天然の玉宮に轟然と駆け入る、呼吸を、精神の火氣を、

此の私の善美と信仰の愛の限りもない、

あの千萬の星の遊離する天球圖と同じき、

豪華と清貧と力こを感じて止まない、
粗剛な紙に傾倒してしまふのだ。

おお 眞つ裸な野猪の春となつて!!

ポプラの立木

空は晴れて甘美な秋の日盛り、

吹く程の風もなく空気は淀んで美の極致！

何んで拭いたか空や地平や空気の滴る清らかさ。

家を一步出るともう此の始末、

私に迫つて来る力は何んといふ無量の若さ潑刺さ、

がつしりと根を組んだポプラが二本、

あの深遠な空の前に喜びのアーチのやうだ。

まるで二本ばかりの立木とは思へないほど賑やかに

枝を組み指先を觸れて立ち交り、

動物園の小鳥の金網のやうに立派で優しい、

嘴のやうに又典雅で活潑な脚のやうに、

枝が歌ひ躍つてゐるかのやう、

不思議に生きた精神のコーラスを聞く。

坊主になつたてつべんの直立ちの小枝が、

午前の充ち来る光雲に拔手を切つてゐる。

下枝には黄金の小判がちかちかと

車輪のやうに私の眼を奪つて輝く。

盛れ上つた波がしらに陽がくだけるやう、

こんもりとした光の壁壘。

高調した太陽が午前のきざしを二三段、

千百の競ひ立つた枝の穂先から、

若若しい光が碎けて微塵をこぼすやうだ。

小聲で幸福があの高い所で抱き合つてゐるやう、

見る眼もうらやましい立派な立木、

お前ポプラよ。

何にも言へずに私は吞まれてしまふ美しさ。

健康さ、大きさ。

幸福のきをひ立つお前ポプラの立木を、

この午前の銀を溶かして振りかけた、

幸福の綾目こまやかな空氣の網を透して、

心ゆくまで見るのが私は好きだ。

壮大で、美しく涙ぐむ麗妙な空の下で、

今私は再び彼等を讚美するのだ。

健固と圓滑の鞭！

幸福と優美の刷毛！

お前金髪の美しいポプラよ！

私の内に起り私の内に波うたせ、

更はその勇躍する精神を堂堂と、

かけつらねてなほ餘りある立派な立木が好きだ。

溢れ来る私の讚嘆のまなざしは、

蟻のやうに枝から枝、梢から梢へかけるのだ。

たまに小供が何気なく立木の下で輪を作り、

田舎の學校で覺えた唱歌をうたひ出すと、

私はこの眞善美の一致した、

無縫の光景についに涙をおとすのだ。

私は其處に見、聞き、感ずるそれ等の事が、

此の世で一等祝されていい事のやうに考へる、

そして私は實に満足に思ふ。

生甲斐は此處にある、

私の日目のたのしい生活の、

熱烈に讚美する親密なお前ポプラ、

緻密で剛健な金網を張るお前ポプラ！

その鱗のやうな立木を見るのが好きだ。

とんぼ

水菖の夕焼色の紫の花の、

その星をつけた幾莖もの花束の先に、

夏もをはり をさないお茶殻とんぼが一つ、

花の賓客のやうに金茶模様の體がどつと動かない。

四枚の古風な翅を前方に扇子のやうに差しのばし、

花もろとも風にゆすれる體を自身制動し、

軽い尻尾を心持下^さげて楽しい花の甘い饗^{もてなし}をうける、

素晴らしい自然の彫刻のやう、

明るい、晴れやかな秋の空気に咲き出したやう、
日日の楽しい生活が此處にも湧きたつ。

ほとんど無風、

太陽は西へ二三尺！

數萬の光芒を徐徐と地上よりたぐり上げながら、
無窮のきざしを縷縷とくだる。

地上が凧ぎた海岸の砂地のやうにおもむろに冷え、
そしてあたりが夏と秋との花壇のやうだ。

突然！

突き放たれたやうに飛び上り、

花傘のやうに四つの翅を、

軸のやうに華やかにまはし

没陽の前に金茶の光輪をゑがく蜻蛉！

夜空を稱ふ

十二月の山風は村落を凍らし、

終日終夜大陸から来る海洋の波のやうに、

何時果てるとも涯を知らない。

おお 十二月は黒い神祕な章だ。

夜空は數等に色別された暗黒から、

灰白色の天氣の雲にいたるまでが漲り渡り、

其の幾萬里と言ふ廣袤を犇と塗りつぶしてゐる。

おお その黒い幔幕を裂いて、

あの暗灰色の雲を割つて見える鑛脈のやうな深淵は

雲間に見える夜のあをぞら！

宇宙を跨ぐ大雪溪の夜景のやう、

今私に新たなかの天空の構造を想像させる。

あの大雪溪！

あの氷河！

あの暗黒の河！

放散性を過分に持った雲の散漫を、

今累累と積み上げ引き締めた力そのものの感じ、

夜は君臨したのである！

私は今素足で無帽で、

あの剛健な雲の流動を見瞞めてゐるのだ。

その見えざる波濤にもまれてゐるのだ。

天を仰ぎ顛倒する思ひで！

雲！

晝間は樺の梢のひろがつた上空で、

純白なスカートをはくがへし、

活潑に銀碧色の空を這つてゐた雲の娘が、

一と度び夜の圏内に君臨した、

戦亂に臨んだクインのやうな力ある美！

私の熱勢はより此處に傾倒するものだ。

今カンオベアの跨ぐ東南の天を殆んど兩断して、

漆黒の稻妻のやうな、

深淵を閃めかす神祕な天頂こそ、

宇宙の傳説のかためをする奥殿！

おお 私はそれに向つてぬかづくのだ、

ただ跪拜するばかりなのだ。

自分の熱聲を其處に抛げ出すのだ。

吹き消され吹き消され遂に燦として本質の輝きをみがくまで！

おお あの宇宙の肩間！

あの裂け目！

其處に荒れ狂ふ大墟裂！

此の幾萬方里の天海に手を取り離した雲の狂噪！

南と北！

何んたる壯重な危機、

あの杳とした星さへ、

近よらないのだ今、夜は！

二十日の月は荒海の燈臺のやう、

一むら際立つた西の黒雲の頭に、

恍とした光を放つ

雲はそれに向つて航走する運命の旅人と！
なんたる破綻に充ちた抱擁だらう。

おお 十二月は荒磯の松！

海洋と痛手と荒野の刃物の風に、

風蠟棒のやうにこすられて、

本然の美と輝きであるものを自身に附け加へるのだ。

ああ この深夜の荒磯に慄へ立つ私は、
實に熱烈なパツシヨンに勵げまされ、
數世紀又は數百世紀を貫ぬいてもなほ、

吾等のうちに歌ひつくせざる美と力と、

總べて人間の魂の驚異であるもの、

なほ其の端緒にさへも到らずにゐるもの多きを思ふのだ。

おお 夜と言ひ、雲と言ひ、暗夜と言ひ、

おお 光明の下、太陽の下、晴天の下で、

吾等の心臓は數千倍に、肺臓は數萬倍に、

吾等の血液は數千石に、瞳孔は數百疊に、

宇宙の絶大に向つて擴張するでなくては、

到底歌ひつくせるものでないことを考へる。

おお 今と言ふ今よ！ 仕事せよ。

汝に迫る力に組みつけ

此の熱意ある全身の波濤を蹴立て、

常に吾等の前に正しく、美しく、力ある天然に向つて、

實に渾身の歩みを以つて、

堂堂と迫らねばならないのだ、

兄弟のためになほ、しかとは言へない萬人の愛のために、

又天然が常に新たなる力の源泉であるために、

吾等は躍進せねばならないのだ

今と言ふ今！

私は此處に絶對の熱力と、

高まる精神の黎明を祝するものだ。

2

樹木を稱へる

自分は早春の樹木を稱へる。

微風と地盤の胎動の中に立つ凡ての樹木を！

今早春の空の上層は多量の酸素を求めらるやう、

若若しい樹木の蒸散する酸素の盛んな鼓動が、

宇宙を充たす雲のやうに天空の胸に脈打つのだ。

おお 大氣は春と冬の電氣分解の大ざらで、

麗妙な春の陽極に集まつてしまつたのだ。

あらゆる樹木は鑛脈のやうな頑丈の根張りを、

しつかりと地中で組んでしまひ、

强健な酸素と清純な微風を飲みくだし、

又木栓を抜いたポンプのやうに、

胸のあたり、がつしりした軀幹をこなはせて、

伸張の脈搏を大空に放つのだ。

おお 樹木の健康な酸素を振り撒らして立つ所、

光明と生長の組織ある造營の孜孜とした噴出の布局でないものはなし。

そして晝と言はず、夜と言はず、

凡そ空閒に餘地あらん限り蔽ひ盡さうとする、

シムホニーの調節を充たすのだ。

ああ 私は散歩の道すがら、通行の憩ひの時、

彼等の蔷薇色の動脈の生々しい屹立の姿を、
どなんに讃仰し學ぼうと願ふのか。

私の眼界を廣める胡弓の大空を抱きかかへ、
宇宙を埋めようとする生長力を稱へるのだ。

一と度は空の奥底に消え、ひそみ、

やがて雌伏した獅子のやうに、

忽然と雷雨のやうに耳朶をふるはせる、

快明なバストラルシムホニーを誰れか聞き得ないと言へるだらうか。

ああ 永遠の夢想、血氣の構想をもち、

私は日に深み行く彼等の浚序樂に伴れられて、

次第に新緑の會堂、酸素の食膳の、

はつ夏の屋外に連れられて行く。

ああ 新緑、日光と酸素の生みつけた、

立派な透きとほる緑の葉むら、

私はその日光の熾、光明の冠の葉むらを讃ふ！

その立派な指輪よ、千百の輝やかしい音譜よ、

音階よ、音程の曲節の葉よ！

明快な表現をする鍵盤よ、

實に巨大なピアノ、音樂の發電所よ！

私ははつ夏の樹木を筋肉のやうに愛し悦ぶ。

かくて眞夏よ！

濃緑の岩かけ、碧いろの巨大な船舶となつて、

樹木は過剰な精力に鬱蒼として立つ。

地上の雲、海洋の暗礁だ、

風は突き當り、嵐は碎け、雨は飛沫となる。

その筋肉の樹木、電波の交流體、

夏の樹木は沈黙の岩石、又雷雨の華客だ。

夏に於て私は彼等を愛する、

暑熱の海岸、炎天の岸邊、爽かな一國よ！

如何に感謝される事か、

遠くから大陸のやうに人を憑くことか？

しかし濃緑の葉叢の壯美な樓閣であつた樹木も、

日光と人間の華客のやうやく薄らいで行くとき、

ああ 凋落の色旗がはためく家とされるのだ。

重い武具、泰平の百姓に姿をかへ、

明るい日光の愛讃と眞實自己の造營に還るとき、

私は且ては高僧であつた人の還俗した、

自由の姿を想ふのだ。

何處も見え、今迄邪魔を仕合つてゐた、

大きな帽子を皆んなぬいで何處も見える。

ああ 安産した若婦人のやうに、

樹木は引締り、尊く今は見えるのだ。

おお 宇宙に林立する樹木よ！

着飾つた衣服を取り去つた健康な裸體、

その漁夫のやうに眞夏の炎天で鍛へられた體軀を仰ぎ見るとき、
私は敢然とした力強い何物かの意志を感じるのだ。
私の精進と、慈愛に充ちた千の光、
その黄銅の筋骨を私は忘れない。

そして遂に互寒と眞如の冬にこそ、

私を取り圍んでゐた情熱が

斷乎とした思ひ出の積たまりなる信念を生む。

彼と共に生き、彼の傍らを離れず、彼に學び、

彼に撃たれ、彼に覺さまされた幾多の靈を。

そして其等を稱へ、讃め、

純眞な祝禱を唱へ自分は歌ふのだ。
其等が私の飛躍する詩句の中心であり、
私の清い心の翼を下ろす健康な床でもある、
その樹木こそ最もよき自然の吸収者、又
その賜物の美しい分配者、
豊富な保持者であるのだ。
私は常に彼に學び、彼に訪ひかけ、歌ひかけて見る。
そして私の剛健のうた 仰性の歌は、
イが必ず基點を持つてゐるからだ。

讚美の生活

此の身を切る程な嚴冬の朝戸出も、
氷のやうな黒い大きい夕方の寒い風も、
私は天氣が何んであらうと道がぬからうと、
元氣ある希望と心から勇み立つ眞心とに包まれて、
この田園のあけくれの素晴らしい種種相に、
充たされた思ひと鞭撻とを直すに感じながら、
活動して止まない讚嘆の心と、
善き心の交はりに一日を生きる悦ばしさに、

私の朝と夕方と、

其の閒を新鮮に充たす讚美の生活とが、
生き切る人生の信念に勵まされて、

田園の無上の生甲斐を感じて止まないのだ。
そして今日をしたたるやうな青ぞらの下で、
人生の健康を祝するのだ。

午前六時！

私は床をたたむ、

小川のリトムが昔ながらの夢を優しく流し、
元氣に愉快に又清く響く、

私は其處で立派な體を祝福し

太く大きい呼吸を川霧の中に吐き出す、

霜や、氷や、雪が今朝異常なものとしてうつる、

氷を碎き腕をまくつて顔を洗ふ、

勇躍する心が萬物の上に金と注ぎかける。

日本晴れの途方もない琥珀の空を仰いだり、

立木の綱に膨れた小鳥の生生した朝戸出を祝したり、

賑やかに染め出して来る淡むらさきの山の日當りを見たり、

霜どけして来る道に立小便をこぼしながら、

漲り来る今日のあの大波に似た希望の豊かさ、

重みのある喜びの光線に、

そのピンクの光にキラキラと、

悦びのリズムを打つ立派で大きな心掛に、

今日の仕事が出来にかかはり、

澎湃とした幸福の大波でうめつくされてゐるやうに思ふ。

私はもう今日といふ善美な一日が、

無邊な愛で充たされてゐることを思ふ。

一寸注いだ目の前の櫛の梢、

水晶の束になつてこぼれる寛の水、

其處に躍つて止まない幸福の心やり。

家に歸ると朝餉の最中、

私は外の光景と、

次第に高まる生活の充溢に、

麥飯の二三碗に眼をまはす。

私は身輕に登校の支度をする。

インキと原稿紙、

懐にはホイットマンの「草の葉」、

それに千家氏の「野天の光」や、

尾崎氏の親しき「空と樹木」

又は佐藤兄の「季節の馬車」に「荒野の娘」、

それと一ト包みにされる私の數多い詩の原稿、
其等が私の今日の仕事の立派な設計となり、
きびしい鞭達となり、

鳴り叫ぶ私の心の隅隅までを充たし、

今朝私が充たされた登校の門出で、

私の心は大地をまつしぐら、

うねうねと波うつ道に子供のいくかたまり、

朝の空氣を幸福にふくらまして元氣に急ぐ、

私はそれ等をくつくと追越す。

でも「お早う」と言ふ聲が、

小供の鮮かな肺臓を啄つてほとばしる。

私はいそぎ足、

後からついて来る五六人が仲好く話しながら来る、

おお 彼等の曇りない晴天の詩が、

幸福の束となつて言葉の火花をちらす。

女の子の髪の毛が、

金いろの幸福の渦となつて先に立つ、

學校へ來るともうベースボールの音、

騎馬の元氣な遊戯、

きりつとした挨拶の聲、

動物園の小鳥の群れ居る金網の側に立つたやう、

私はそのにぎやかな動亂の中にまれゆく。

此處は私の心のガーデン、

幸福のもつれで精神が甘美にをどる、

何も彼もみんな忘れて、

今新しくもたげて來る希望の浪がしら、

私はうちつくりだいで、

楽しい日課の一日を夢想する。

今日働かう、

今日と言ふ日の仕事のために、

善き精神と美しい智慧を磨かう、

そして喜び輝く魂の内奥に、

凜と根下ろす心の光明を増さう、

空は晴れ、

湖心にかがやく午前の太陽！

私は飽くまで廣く大きく讚美するのだ、

肯定に充ちた生涯の堅い連鎖のために生きるのだ、

おお この高まる日光と氣稟の下で、

吾等の生命は永遠をあこがれてゐる。

二月の空

二月の曉の空は、

深い紺碧に明るみ、

廣大な空一面が金鱗の光を放ち、

あの幾萬里の廣さを貫いた天庭の奥には、

かなりの強い光が曉を迎へてゐるやうだ。

下弦の月は東から七八段、

半圓に満たない幼ない弧形の月は二十六七日、

その悠やかな傾が一段と空の光景を高め

宇宙の壯麗、豪壯、華美、悠遠の輝きで、

うち廣められた美の大廣間、

力の大建築、光の青巒幾千巒！

こを想見する大空を悠悠と、

月は横たへた體を極致の美に輝やかせてゐる。

私はこの滴る碧さを浴びながら、

明け行く地球の一角に立ち、

悲壯な光球に向つて健康の讚嘆を放つのだ。

おお この光に身を倚せてゐる自然の美しさ、

又輝かしさ、素直さ、

かすかではあるが強い月光を享け、

闇に包まれた家は、

あの所を知らない星にも比ぶ永遠の美である。

枝を渡る雀の聲！

體をかくして飛ぶやうに快活な聲のみだ。

今、曉をおかす美と力とは、

その偉力を兩分して起つたのだ。

曉の闇は四圍の鐵でかこんだ山脈にびつたり寄り、

散在する田舎の住ひは雞の聲で、

今朝の寒冷な大氣を切り割るのだ。

障子に映ゆる電氣のあかりは、

闇に立てられた金の扉のやうだ。

そをゆるがして山鳴りして来る朝風は、

あの完美に充ちた天を載いて、

此の世の地上を清浄なものとする天使のやうだ。

そして月を東西にかこむシリウス、オリオンは、

激しいまたたきを續けて、

臨終の光を放つのだ。

おお 今、暁は田舎をおかしてゐるのだ。

その鐵鑛の光、

凡て此の世の力であり本然であるものの、

ぢかに感じられる地上の意力となつて、

動き出してゐるのだ。

立木は磨かれた枝を張り、

夜空の盛宴は客の引けるやうに、

只大廣間に月のみが居残る。

かくして田舎の村里は全き朝を迎へるのだ。

さて小川の淵！

木戸先の出會ひがしら、

此處に到るところ清く美しい挨拶が、

此の世の人の初めての善美の言葉となつて、

逆るのだ。

月

外へ出ると五日ばかりの月あかり、

西に偏かたよつたと所ところの空が、

銀河の一部のやうにまばゆく明るい。

おお 一寸出た月がもう入るのだ。

其の邊一帶の空は深く碧く、

星はあくまで元氣！

しかし東の空は引き立つた元氣なく、

おだやかに極めて氣儘のやうにゆつくりと、

星は小勢に見えるが輝やいてゐる。

それに比べると西の空は瀧壺のやうだ、

夜の力がそれに向つて堂堂とおちこむやうだ。

流星に雲も生生として澄み切つてゐるが、

東の方は妙に暗い。

おお 月よ、自分は悲しく思ふ。

月よ、もつと廣大な光を見せて呉れ。

おお 月よ、

もし單に夜の概念から月を取り去つたのみでも、

君よ、人間の魂には動搖が來るだらう、

人生の詩は暗く曇るだらう、

しかし一抹片輪の新月でもう。

あの希望の空に金釣の鉞をさして呉れたなら、

人人は千倍にも生き深めることが可能となるのだ、

おお 月よ、

大きくなる希望の月よ！

幸福を浴びて立つ

春よ、天然の神品の春よ！

大氣と地盤の壮大な婚姻よ。

太陽は見違へる程數千倍の元氣の若さで、

春の前線の大氣の海を、

眞つ裸な明るい光で充たし、

萬象の歡呼に爪立つ大地は武者振ひする。

おお 君天空の春の火口の、太陽よ！

満潮の光の帯を結んだ日輪の娘よ、

君こそ春を總括して立つ明眸なマリアだ。

その燦とした光の指針の萬億の羽よ、

健康で潑潑とした山禽の隼の太い光よ、

パストラルの序樂ロンドの演奏をする日光のオーケストラよ！

私は地に花咲く太陽の、

萬傾の瀾激の光を浴びてしつかと立つ、

早春の光明と切つても切れない幸福の駒鳥だ！

おお この私の心の満月の感興よ。

三月の巷間は、

日光の明るい網にかかつた娘や、小供、女や男の、

鮮魚の群がびちびち跳ねまはる！

おお 春は水の月、

大氣の色づく月！

そして吾等の思念に翼と智慧の生れる月、

さはれ私の燃情は、

この廣大な春の壁畫の空氣の一部を、

切り取つたやうなとんでもない朗かさ。

淺黄の水色木綿の瞳をもつた幸福者！

かくて私自身の讚美の窓を天然に開け放つのだ。

たしかなる仕事に向ふ自愛の念と、

緑の健康を愛する光明の心と

生活の充溢を孕む頑丈な太肉と、

なほも此處に未前の襟がれ、

不變の恆星、太陽の種子、

夢想の花輪の君よ、「愛するもの」が、

夜ありて晝あるごとく吾がものとなつてゐる光の人生。

再び私は自身の愛を溶かう！

季節の流れ、春の暖流に棹して。

おお 今私の名指す君よ 愛する君よ、

私の健康な精神の充ちる緑の會堂、

君のうちにこの立派な讃仰の堂宇を私は持つ。

林立する精神の渴仰の庭園と、

生命の住み家である夢想の森林と、

美しい矜恃と優婉の弓をかけた森の木木を、

熱情の赤い實の房房を着けた梢の無數を、

高く空に箒き上げた清純な青い杖を、

君の心のうちに見、聴き、又熱烈に感ずるのだ。

おお この美しくしき森の冠よ、

今年二十歳の田舎娘！

私は君の前に在つてこそよき戦士、

君、現實と夢想、光明と暗示の蠶よ！

かくて私の大小の喜びは、

君の愛の限りもない羽ばたきのうねりに乗る、

ああ 世は甘美な鮮魚の行交ふ春の湖、

私は日日君に培はれ、自身生長する、

薔薇色の脚を持つた幸福の山鳩だ。

見よ、人生の正しき歩調は此處から發つ、

正しくあれ、誠實なれ！

おお 美と力とを愛の鐵鎖で結ぶ君運命の連結手よ！

君たち幾萬の時には身を捨てて、

此の世に離散する正しき美と力との若者を、

日日幾千となく結び合はせ、

生存の謳歌と人生の讚美を満載させ、

如何に壯大に發車させることよ、旅立たせる事よ！

私がかかる愛の高らかな汽笛を、

朝に夕に、春に夏に、秋に冬に、夜に晝に、

幾つともなく聽く事を悦び、祝福したいのだ。

かくて地上は、美と女との愛によつて結ばれた、

人生の兩脚、美しい男女の

縦横に驅走するのを願ふ。

おお かかる運命を持たせ、幸福を果させる、

君たち田舎娘よ！

私は今君に更に擴大された愛を訪ねよう！

天國は必ず此の地上に在る、

幸福のコース、愛のレールは無盡に敷かれる。

君たちの手で、精神で、愛の勤勞で！

そして正しき男の純眞な力で！

善き働き手、

高き精神の僕しもべの拓ひらくに任せあるのだ。

おお この愛の蠶いとの向ふ限り、

吾等の行手は光明と讚嘆の交叉する緑のトラック！

新緑の樹樹と、聳立つた山禽と、

荒野の星の無数の昆蟲の群！

清明な大氣の果積を抜いて咲く野の花々と、

堅實な生活の造營に勵む地蟲の勞働者！

其等の歡呼した轟きを聞く新市街！！

私は其等に全き挨拶と愛着を持つ旅行者、

君「愛する君」と生の齒車を疾走させるものだ。

忍苦の日を経て高鳴る精神の汽鐘を向はせ、

大ぞらのもと太陽の基準の地上に、

放たれた二つの太陽の子吾等！

永遠の夢想を張りつめた大ぞらを傘に、

清純な愛の土を敷いて骨組遣し、

青春の歌、讚美の堂宇をうち建てるは今だ！

命に替へて愛する君よ、

あらゆる私の謳歌の輝やかなしい曲節となるものよ！

君の名にふさはしい美の冠、「雪子」よ！！

おお 私の君に熱湧する愛は爆發する。

盛装の花束、又優しい野の白百合一と莖の君よ！

それは「愛する雪子」と言つてしまふには、

あまりに氣高く、又淺ましい。

おお 野の百合、愛の駒鳥よ！

君は人間の愛の眼醒めの温室の湯氣、

二なき清純な心の水差しを持つた素朴な娘！

吾等の交歡の繚纏たる花園に、

四季の風韻と美觀を注ぐ丹念な園丁。

君自身典雅な花のシンよ。

かかるとき私は、

歡喜の花冠を戴いた善き戦士、

凛とした男として光榮ある仕事をもつ若者！

仕立てよ！ 一臺の赤馬車。

純眞の善美の渦まく春の原頭に、

私と君の胡蝶のロンドを歌ふために、

清純な愛の駿馬に堅く歡喜の一と鞭を當てて、

其の華奢な赤馬車の馭者臺に、

善と美の強力な電池の二つとなり、

發情の火花を、魂の振動を、肉身の純化を、

湖のやうに廣い清澄な四つの瞳を、

萬物に向ふ愛の振鈴の言葉を、

夜天に輝く隕星の光のやうに、

その強烈な愛を素描する野天の天真な散歩よ！

放てよ、行かう！

はてしない春の縁日の遠乗に、

夢想の森林に、ヴェロンの浦谷に、

燃える田舎に、眠れる都市に、

青春の若木の生命に輝く限り、

吾等の愛は無縫な燃焼を、磁力を續けるだらう。

かくて清き森駭を感じるまで、

そして此の上確とした光明の港に、

永遠の生活の錨をまき下ろすときまで。

百年の夢想を、思慕を、愛憐を、光明を、

仕事を、健康を、感奮を、熱情を、

努力を、忍苦を、勵精を、

畢生への港へ到る大道として出發しよう！！

おお この黎明を翳して旅立たう。

春よ、お前の展望をたのしみ、

「愛する雪子」よ、君の健康を愛撫し、

日曜の散歩、放課の時間を讚美で埋めよう。

ああ 私は青春の兩極を持つ、

何れに向つて航走しても暗礁はない、淺瀬はない、

廣廣とした大洋で、深い深い清穩な波の上だ。

再び私は歡呼して更に大なる發見の祝として、

君たちの、純心な愛の一盞を享けよう！

清き人生の巨大な初航路に向ふ舷ふたてりに立ち、

しかと示す羅針の前方を、

君「愛する雪子」と、

實に壯大な歡喜の胸を躍らせて見つめつつ、

春 光

さあ、若葉の青い扇を翻がへし、翻がへし、
春色にぬれた田舎の明るい壁畫の前で、

大きく映る春情の投影畫をしたひ、

春の情感を婦女のやうに燃やさうではないか！

春光よ！ 麗情の野火を上げ、

若い男の情熱を三月の大氣の旗にしばらく、

晝間の化粧で伸びのびしてゐる野娘たちの、

愛情の深い養子にしてしまつたらどうだ。

男は食ふことも忘れてしまはうし、

巷の灰殻のやうな家なんか失くしてしまふよ！

そして仕事や、字や、夫婦仲の彥星達まで、

一層有聲な野のものとして、

樹蔭へでも、沼地へでも、引つ張り込んでしまひ、

空氣のランプを大きくゆすつて、

田舎の圖面を活劇の往來とするだらうよ！

娘よ、そしたら僕たちは、

田舎電車のお花見のお客分のやうに、

思想の外套や、慾情のチョッキをはづして、

社交の重たい兵卒靴を巷の溝に捨ててしまひ、

麗麗と鳴る空いろの下駄を鳴らして、

粗野で大きい情感の帽子をかぶつて、

花壇や、野の草市の娘や、森の家族たちの、

それ等の野の豪族たちに、

養子の挨拶をしながら、

晴れやかな情熱の思ひを満載して、

到るところで笑つたり、話したりして、

今日だけは田舎の花摘み日記の筆僕となつて、

一日中大氣のテーブルで、

日光の廣い机かけをひらひらさせて、

青い草汁のインキをつけて、

春の一節を靴かばんの中にひそめて歸らう。

星を讚美す

まさしくこれの秋を歌ふならば、

天然がかの夜空に送電し、

且つ輝やかす無数の星の火花の海の天頂をだ。

其處に光耀の結晶をかがやかす、

音なき電霆の無數！

永遠の宴、まことに最後の晚餐を燦と張る、

君銀の燭臺の立ち叢がる瀧壺のやうな銀河の帯！

私の讚嘆はあの悲壯なシーンに隨喜するのだ。

そして期せずして正鵠な思念はリズムを打ち、

恵まれた造營の生活を、

天に向つて熱烈に積み重ねる時！！

その深い色彩、天才のパレット、傑れた彩描よ！

肉眼に明滅する星の光輝ある炭素線、

夜空のタンクスよ！

かかる壯麗な一つ一つが、

私の肯定に充ちた生活の高調されたリズムの、

絶対の信念の動きなき絶対値！

感激と愛着、思慕と苦惱の表はれた極致の存在。

おお 私の思ふ事、仕事すること、

天然に呼びかけること、私の熱情の喜怒哀樂！
 その總べての私を組織するプラス、マイナスの中、
 最も向日性の男性的に燃える、
 思念の仕事の一點に凝集する最高の光こそ、
 あの神祕のピン、天と地の夜のかためをする
 白熱の飛沫、千萬の星星だ。
 おお 私の無終の美の探險が持續するかぎり、
 此處に傾倒する讚美と刻苦を積み上げる事だ！！

ああ 思へば千萬年を通じて、
 常に人間の清い精神を愛撫した星と吾が世、

大古の神祕に包まれた怖れの生活から、
 大古の沼、未到の森かげ、創生の荒野、
 その遼遠の涯から告げられた戀の纏綿！
 近代の科學と叡智が近づけた讚美の生活、
 中世の神神のシムボル！
 其の間に幾たび引かれたか名もない直線、
 ああ 星に向つて隠すものが誰れあらう、
 星に願つて胸を撫でないものが誰れあらう！
 ああ その戀路よ、嬋曳の航路よ！
 君等の最も涙に濡れた航路の疑ひない標識よ！
 人類の涙壺よ！

君は常に人類の學ばない保護色だ！

お前に告げよう、且て私の心を眠らせた事のない！

ああ 人生が呼びかけた星への通路、

忍んで語り明かしたたつた一つの會合點、

又空しく永遠に結ばれず眠つた純心なハート、

今こそ私は、

其等の同胞を想見し、揺り動かし、

人間の熱烈の、哀寂の、破局の、勝算の、

絶えざる思慕の橋樑へとし、

忍苦の精神を橋桁とし、

讚仰の板を張り、熱望の心の釘で堅く打ち、

眞摯な歩みを一齊に、

天體の微塵の星に向はせるのだ。

おお 其處に無能な學識の死屍を瞰下し、

縦横に走る人間の邪道を射視し、

力なき生活の巷街を蹂躪し、

惑亂の社會を覆へし、

此等の醜俗を高邁な精神で止めをさし、

今や轟轟と走る深夜の旅、不夜城の星へ、

吾が全盛の健康の歩みを運ぶのだ。

ああ 極小、極大に宿る。

眞、善、美に酔ひ、

一路私は清い世界に旅するのだ。

かくて、思へば星よ！

君の王國は香として餘りに遠い氣がする、

而しもつと近かれと私は願ふのではない、

お前の鋭い光年に乗つて、

私の旅は眞個に早いのだ。

アンドロメダの招く東天よ！

此の壯大な夜を照して、

貫ぬく意志の高なる心をもつて、

喜びの星への橋で幾たびか振りかへる、

天然の美しくしさ、豊かさ慕はしさ、

此處は中空、天地の夢殿だ！

天に負けない地の賑森さ。

ああ かくて私が私の生活を驅つて、

深遠の世界、憧憬の星の園に、

一寸の領域でさへ擴め、高める事が出来るとも、

搖籃の地の床、生存の森の家を、

どうして讚美せずにもられよう

その希ひと信行をはつきりとしたいため、

もつと高く、もつと廣く、

地上の素晴らしさをうたひたいため、

あの無窮の天空と合體させたいため、
私の壯大な歡喜を合致させたいため、
天の地の固い婚姻の盃を漲らしたいため、
高く又私の求むる高みへとよぎるのだ。

おお かくて歌ふ私の生甲斐！

明と不明の境域に斧鉞を入れるもの、

その不可思議な森とした響きを、音綴を、

誰か聞きつけて喜ぶ者も有るだらう、

鼓舞して呉れる者も有るだらう、

だがこれは私の知らぬ外界、

私の力量の内のこと！

何が現はれずとも私を喜ばせ意氣づける者は、

あの聲を描へて勵ましてくれる千百の立木！

強い鞭撻と持久力を忘れさせず耳うつ小川の深いリズム！

これが血になり、熱となつては私起つ。

おお 私は星を歌はう、感極まる生命を驅つて！

かくて讚嘆の日のつづく、

熱望の奥底の深遠な星と我が世！

まさしく秋を歌ふならば、

讚詩の跳る天頂の壯麗さをだ！！

落日の空

壯麗極まる落日の空！

無量の宇宙に散らばつて、

人人の幸福のためや、

伸び上る無数の立木のためや、

又は嘗つて不幸であつた人も、

幸福で人生を稱へる事の出来るためや、

悲しい境涯に在る人人にも、

過去の幸福で在つた當時を憶ひ出させ、

さうして此の上まだ不幸である人人の事も、

いつ知らず思ひ出させ、

まして自分の不仕合せな境涯に元氣附け、

此の世に役立つ仕事を更に考へさせ、

希望と幸福と健康と勇氣の交叉する、

日光の十字街に皆んな誘ひ出し、

此等の人人に勇氣附け更に旅立たせるために、

おお 今日も一日雲と語つたり、

風の氣輕な娘と微笑んだり、

群れ上る小鳥に口づけされたりしながら、

活動したお汝太陽！

今其等の別れのきはで、

飛び廻つてゐた雲の娘も行儀よく、

數列に立派な列を作つて並び、

風も位置高く立木の梢や中空に上つてしまひ、

靜かに頸垂れた一と時の地上！

今此處で私は、

朝うけた喜びを千倍にも生き深め、

此の落日をより美しく熱烈に讃めつくし、

充ち足りた念願で讚美するのだ。

遠く散らばつてゐた金いろの光線も、

爛爛と光り輝く落日の杳か西の空に、

其處に引かれた美しい金の隈どる、

放射狀の豪華な大道を！

悠悠とした列を作り、

金の濃塵を蹴立てて、

今歸つて行くのだ。

其の放射狀の宇宙を貫く壯大な大道！

今現實の天然を美に醜者とさせる偉大な弱者だ、

その天庭の道路！

光線の往還！

何んたる偉さ大きさ！

それがおお晝の間は絹の織物のヴェールのやうに、

無数の金いろの電線のやうに、

地上に釣られてゐる豪壯な大道なのだ。

今靜かに頭をもたげる森、人家、電柱、

そしてあの光の大波から夕方の空氣に浮き出す、

うす紫の山山！

それ等にかくも瞭然とかくも美しく、

かけつらねてゐる光芒幾千億の道！

私は此の光景に壓倒され美化されてしまふ、

我が身にかかはる數數の出來事や、

又は未來にかかはる私の仕事の夢想や、

遠く離れて美くしい精神を燃やす友だちや、

それ等のプラス、マイナスの心持が、

瀧のやうな健康な幸福に魅せられてしまふのだ。

あの道を歸つて行く光線の娘の美ましさを

それにも増して今私の恵まれやう、

私は之の著大な光景に瞑目する。

ああ 賑やかな天庭の入口！

まるで途方もない大きな松火たいまつをたいて、

皆んなの歸りを祝つてゐるやうだ。

そして皆んなの顔が松火に照らされて、

健康な體が金像のやうに輝やいてゐるやうだ

私は其れを夢想し隨喜し合掌する。

皆んな善き仕事のためにお疲れ！

そして今日の幸福のためにお休み！

それから明日あるために善く元気で！

と、あの入口で各々が話し合つて這入るやうだ。

嬉嬉として割り込んで行く賑やかさ、

私は感動する！

地上を立派しようと！

私は發奮する、

悲壯な涙さへ湧きたぎち、

私の體を光に向つて擺撼するやうだ。

人生を光明のために働かないで、

何んにならう！

中途半端な心掛けで何が出來よう。

今私は此處で再び讚美するのだ、

離伏するベートウヴェンの海なりのやうな熱情、

又はゴツホの煮え返る光彩と力量の渦巻き、

そこにレンブラントの金いろの燦然！

それと一緒に自分の確信が、

大波のやうに引いてはかへす。

ああ 善き仕事に勵まう、

此の善き心掛で最後を飾らう

眞面目に精出さう、

そして光榮ある勉強に身を入れよう、

でなくて此の壯重な落日の空に向つて、

外に何んの確信ある信念が身を燃やして呉れよう、

私は喜び勇んで此の光景に見惚れて立つ、

善き父母と、姉と弟たち、

そしてこの張り切つた美しい心で愛せられる、

世の幾億の我がはらから。

私は勇み立つ！

善き人生を送らうと、

善き心掛けて生きよう！！

田舎娘

田舎の朝を情怨の炎で燃やしつけ、

火氣のボンブで憂情の雲を掻き消してしまひ、

朝つばらから村人の繪圖に赤い誘惑の色を塗り、

電気仕込みの戀情で男の陽極を捕へてしまふ。

ああ 緋鯉のやうな凄怨な戀娘の眼くばせが、

熾んで又華やかな鱗の誘惑をひらめかして、

濕つた私の心に水いろの燈火をつけて、

すつかり心のうち外を明るく捕へるではないか。

田舎娘は明敏ではつきりと眼を開き、
潜水夫のやうに空氣になれて歩きまはる、
その鯉のやうな田舎の赤珊瑚の娘が、
青葉の溶け込んだ田舎の空氣を引っぱり廻して、
釣鐘の心を股股と押し出して、
房房とした黄金いろの赤銅の、
みのつた精神をまで明つばなしにし、
北歐の冬の夢物語りのフエアリーの娘のやうに、
断片的の對話にも、
幽韻と優しい豊満な魅力と、

發情する美くしい握力とを感じさせ、
この肉聲の陰極の火花に觸れるほどの人人は、
風のやうに田舎を戀してしまふ。

塊根のやうな豊かな心情と、
眼ざめる青葉の言葉とを持つた田舎娘は、
僕達の爽やかな念情の收穫の野菜となり、
青物市場の清涼な興奮劑となるのだ。
幸福の夢で日光や、男をとらへ、
田舎の道を大氣の羽となつて歩くと、
道は煙のやうに上氣して曲り曲る、

おお 精神の青やかな情念で、
この大道を娘と僕とのもうろうとした、
婚姻の結納の帯にしてしまふ。

ああ 私は田舎の花摘みだ。

ほたて貝のやうに青く、大きく、又圓く、

田舎をいつも祭り日にする娘こそ、

現實をすつかり握りしめ、

思ひを華やかな夢の鞆帯でつつみ、

花のやうな肉體と、

火花の生活をいつも續けてゐる。

此處にゐたでは

大氣がつねに娘の周りを遊星のやうに流動し、

花咲いた野原がひらけ、

波うつ精神がぼかぼかに散る。

おお 田舎は硝子いろに明るくすぎとほり、

獣けもののやうに多情で素朴なものだ、

おお 田舎娘は、

現實だ、夢だ、そして、

大氣の輝やかなしい燭臺だ!!

雪を讚美す

雪は降る二月はじめの牡丹雪が
粗い花びらの斜の飛紺模様。

見てゐては積るとも思はれない雪の花吹雪が、

立派な冠を持つ堅琴のやうな、

響のこもる冬の立木の絃糸をたたく。

おお それは、

幽玄無暗な空のほころびの糸屑か、

雪は無数の空からの小川のやうに、

長く、細かく、注いでゆるやか、

そのはるばる空からお越しの小川の娘。

おお この立派な下崩えのする春近い地上に、

春の遊の支度を整へにか、

又は立枯の草や幾千の樹木の家族に、

冬を通して荒れ傷んだ彼等の着物を、

人人や、動物や、季節の花や、無数の昆虫や、

地蜂や、緑泥の水蟲や、ロンドの蝶たちの、

やがて遊戯場となり季節のたのしい學問所となる、

野原や、村外れの芝生の堤や、川堰の上や、

小川の淵や、村村の庭一面のかけ、ひなた、

其等のめぐり會ふ春の立派な楽しみみの冠となるためにお前雪の小娘たちよ、

おお 春着の今年見立てにか!!

お前の訪れはなんとなく幸福で此等の夢想を、

一ぱい包んだエンゼル達の冬の荷船だ。

草木は喜ばう、節くれ立つた樹木も芽を出さう。

お前の來ることは奇蹟のやうで又、

美しくいらんまんと花咲く精神と肉體の、

實に無量な健康劑だ!

溝の上、小川の銀帯に、

今雪は清い娘の感激の涙のやうに光つて消える。

それがやがて實に今となつては、しかとは見えないが咫尺の間に咲き出す、

春の喜びや、新緑の健康に、

實に擴大な力の大廣間、美の大建築に、

薔薇色の血となるために注ぐのだ。

一切(生)に希望と歡喜のしかとした充溢を植ゑつけるために!

おお 雪の朝は花曇りのする四月の甘美な空のやうに、

無縫な快美に温められて心爽はやか。

おお 春の娘に呼びかけられる老いたる冬の朝、

籠の鳥も今となつては可愛いままでにまめまめと、

楽しい明け暮れに球と肥え太り、

又外を出歩くくやつちや鳥は、

やうぢみや胡桃の堅い實をつついて磨り減した黒檀の嘴で、

里の春めいた光景に、

山家育ちの素朴な讃歌で唄ひ囃すのだ。

あのと、き色の羽毛で織つた簍を張り切つて、

今朝の雪に交る快活な飛び模様！

私は再び雪に思ひをかける。

雪は降る二月はじめの牡丹雪が、

春の物語りの夢の敷敷を積み込んで、

現實の港につめかける。

田舎では常に新しく美であるものが、

實にゆるやかに而かも堂堂と横行してたのしい。

いつものやうに晴れた鮭いろの青ぞらなら、

我が家の東口に樹つ赤松の太い幹を、

夕映のやうな色に照らして、

朝日子がキラキラとした鮮やかな視力で、

天然を壮大な、輝きある永劫な繪とするときだ。

だが今日は幸か不幸か、

白鳥の翼のやうに曇つた冬ぞら！

だが今の私に若し不幸と言ふものが在るならば！

これ等を歌ふ本質の力が足りないことだ。
而しそれは悩み以外の悩み、
その不足を悩んでゐたでは私の破滅、
今の私は狭少な理窟は抜き、
歌ふ事を第一としたい。

向うの家の屋根を掃いて立つ若い樗の、
群がる腫を見張つた睫毛の梢が、
大魚のかかつた魚獵網のやうに、
曲線の立派な造營の組織！
その網をくぐる雪の子供や、若い娘や、女が。

鮮魚のやうに躍つて跳ねる！
讚美せよ、讚美せよ！
春の花車は大空に勢揃ひ、
その一連が地に今お着き！
皆んな外へおいで雪の子供がお待ち兼ね、
みんなはきはきしてゐて地の息子の誰れよりも、
立派で美しく花のやうに元氣だ
その雪が朝からお待ち受け、
そら！ 隣の子供が、
お羽黒とんぼのやうに庭先で跳ねる。
むく犬が雪に埋れて尻尾をふる。

みんな出て娘から楽しい春の言づけをお聞き、

近しい思念と歌ひたい心で私は一ぱい。

ぢかに天然の讚嘆に根ざし、

直ちにそれに群がる詩想の喜びの萬朶の枝が、

實に心の奥底から揺り上げてくる人類の愛と、

その燦として立つ壯美な信念が

いつ知らず清純な思ひを放ち、

それに近より來る人人の幾多の心の鞭韃と愛が、

颯爽と美と魂の文化の混する風を起すのだ。

私こそ悲壯な作曲家！

大空と大地の華やかな機織りむすめ！

空は明眸な神の子たちが、

安息してゐる純白のベッドのやうだ。

その絶美の思念に育てられた私の礎！

それをしつかと守り、

歌ひかける儘に此の夜と晝、又春と言ひ、

夏、秋、冬の何れと言ひ、

總べて此等より求め充たされる魂の花咲く枝に、

私は一切の信念を咲かすのだ。

かくてこれが天然の中に立ち交つて、

實に健全に澄澗として花咲き聳え立つ事を望んで止まないのだ。

例へそれをやましい近代の冷笑が傷けようとも、

凡そこれ等凡て吾が所産である葉や、花や、音や、
又幹を一切神の攝理の供捧に失ふ事があらうとも、
私は一切の悪を否定し、

一切の善からぬ仕業しわざに正義を保ち、
常に更に大いなる春を待つものだ。

そしてそれあるがために

私は詩作の外、他の一切の生涯に於て、

この春ある喜びの信念を磅礴はつぱくしたいのだ。

なほ深い憬がれの田舎の風景へ！

春の海歌風は田舎を洗ひ、

琥珀の明るい空は新緑の風景を抱き込んで、

地上は沸瀝する春の容姿を傾けて榮えるのだ。

横雲の大鵬はカメラのやうに明るい地上に、

船底から春の影をおとして行く。

ああ春、あの底の見える浮雲のヨットには、

無数の喜びの房房、輝かしい片片が生れ、

立派な春を造營する善美の造幣局があるのだらう。

そして途途野生の小供や、小娘や、婢や、男に、
愛撫の破顔を向けて行くのだ。

そのゆるやかな船脚の躍る大ぞらの下、

田舎の平野はこもりと花咲き、

滾滾と湧く花で埋められた一圓の視野は、

まるで瑪瑙かなぞのやう、

花花と新緑の竝木と流れが田舎を圍くする。

その壯麗な飛沫に煙る四月の村村は、

家家が家畜の群かなぞのやう、

連れ立つて川鳴りを慕ひ大道を狭んで悠悠と、

無窮の旅をするもの様だ。

その氣高く涙ぐましい人間生活の造營の日目を、
互に縫れ合ひ助け合ふことに依つて生まれる、
自然物の間に蟠まる相互の血縁を讚美しつつ、
不死の不問の止むなき造營に戀戀と勵むのだ。
私は今その偉いなる真相を大古の夢をゆすつて、
靜寂と歡喜の宇宙の肺から擲取する、
新鮮な空氣と愛とに脈搏つて、
宛然靜脈と動脈の循環してゐるやうな、
田舎の村落を實に心の奥底から稱へるのだ。
私は家屋を讚美する、寺院を讚美する、
さうして魚るを漁村童を大古の夢に活かして見る。

ああ 田舎は桃、櫻、杏の素晴らしい境廓をもち、
椈、杉、松の聳えたつ鐘樓をもつ。
人人は城に集まつて閑寂な酒宴を催し、
巨大な立木は早くも夕暮の風の音を起す。
一步新緑の川瀬のやうな田舎へ出ると、
待ち惚れたカンバスに向つたやう、
私の早鐘を打つ感情は凡べての物を素描する。
強剛な、粗野な木炭の私の素描よ！
風の囁き小川のトリル、
其等を私は今日限りなく大きく廣い、
春の喜びの感興で抱き度いと願ふのだ。

もつと強直に もつと近く、もつと明潔に、
私は春を筋肉から感じたいのだ。

電線も美しいカーブで滑走してゐるやう、
微風と健康な氣流の中で何物かを貫いて走る。

大道を歩く人人は、

眞直な道も樂譜の様に曲つて歩き、

その一步一步が重大な役目を持つものの如く、

大地に吸ひついて偉きな力を、

地中から引き抜いてゐるやうだ。

實に道を歩くことは歡喜だ、情熱だ、多産だ、

魂の産業は大地を歩くことに依つて 大地を熱愛することに依つて生まれる。

大道は宇宙の黃道だ、光だ。

その健康な足並み、

汽車よりも壯大で、闇よりも剛強で、

鐵锚よりも人間のよりも根本の歡喜を、愛情を、

深くたしかに地中に下ろしてゐる。

おお大地より、より確實な情熱を發くものよ、

私は其等を讚美し、謳歌するもの！

私は大道の鍵、人間のキーを大地に向つて、

思ひさま強く押しつけないのだ。

そして其處から未前の爆音、沈潜された妙音を、

あの青青とした大空の悠幻な弓に、

響かせて見たいと願ふのだ。

これこそ私の詩の原泉、精神の鑛脈だ。

大地は私の黒鐵の鞭、萬斛の興奮劑だ。

おお その地にこもつた偉大な力よ、

私は始めて自身を解體し、味得し、吟味して、

その遠大の大鵬に似た讚美の翼を空に向つて放つ、

人聞の歡喜の進路を動かすのだ。

娘

田舎娘は情熱のポルトで、

水と大氣の赫赫とした淺黄色の通辯だ。

彼岸花の響を飾り草色の虹を引く田舎娘は、

大氣と水の私生子で、

雨や花吹雪や夕立と野原で婚姻して、

野薔や、白薔薇や、野苺と媾皮をつけて、

田舎の清朗な天氣を誇り、

青い空氣を一ぱいつけて毎日興入れをする。

そして今は情熱と一日の仕事の、

勞作のかさむ六月の村村だ。

娘たちは激浪の中にばつとつく燈臺のやうに、

晝間のエンヂンのやうな疲勞の夕、

田舎に早くも起る青い風に誘はれて、

情熱の思ひを銀河のあたりにはせる。

ああ かかるとき稲妻はそつとこの蜜の様な、

田舎娘の美くしい愛戀を盗みに來る。

娘に六月の幽暗な思ひを焚きつけよう——

ベチルスベチルスのやうに感電しよう！

ああ こんなとき娘は自分の心の奥深くひそむ、

王宮の物悲しさを感じるであらうし、

思ひを托すことの出来ない自分を、

貧しさや、不仕合せや、苦勞さよりもどんなに、

稲妻に感じて草場を戀し、物蔭を戀し、

細い灯火を戀するやうにして、

あの美くしい感情を蚊のやうに細らせてしまふだらう。

そして稲妻は劍のやうな思ひで、

氣の弱い田舎娘を即死させてしまひ、

六月の草深い田舎に、

うら若い娘の悶絶の黒髪を霧のやうに香はし、

幽情と獨念をゆるゆると草叢から燃やすのだ。

ああ 田舎の六月は、

牽牛、織女の逢瀬の波を、

田舎の草叢に描くときなのだ！

そしてその悲しい怨念で稻妻は、

若い稻穂の娘をもう孕ませてしまふのだ。

娘はもう羅紗のやうな氣になつて、

男の心を草笛のやうにとらへ、

青い情念の音色で吹きならし、

月の清らかな宵合意の管にして、

又怨情を締め殺す紐にしてぐるぐると巻きつけ、

あつい熱情を吹き交すのだ。

ああ 六月田舎の娘は帯も解かうし、

長い黒髪を木立に若い男の腕だと思つて、

巻きつけて幸福な星を一晚中探しましょう。

そして裸足になつて清い歡樂の馬にも乗らうし、

そつと顔のうつる白い瓜を噛み切らうよ！

私はこんな田舎娘の累累と立つてゐる、

六月の田舎を不如歸のやうに戀してしまふ。

娘は液汁のやうな肉體を、

有聲な強い念情で張りつつみ、

海岸の風見のやうに、

男の心をかんじ、大氣の觸鬚を握りしめ、
すつかり男を祭り日の太鼓にしてしまふ。

男は夢中になつて娘のうつる樓閣をとび廻らうし、

戀情の太鼓を打ちならして、

青い夜更けの村道を、

案山子のやうに瘠せこけるまで、

娘の見張り番をしてゐることだらうよ！

燕

春になると小さな櫛子窓や丸窓も、

すつかり南風みなみかぜへ向けて明けつ放してしまひ、

しわしわと上陸して來る春の海の、

海軟風をほたてがひのやうに口をあけて、

私の獨座の裾、机の上に誘ひ、

私は大陸の航海圖を起稿する。

そして夢と大氣の新酒を一日中の食ひ物として、

北回歸線のあたりをもう遠い遍歴の異國として、

あの海旋風の魔術に引つかかつて、

新しい田舎の野菜の彩りを戀して、

赤道直下の大陸風を誘惑して、

田舎の大氣の澄んだ晴天を、

都會のやうに忙がしく賑はしく織る燕よ！

ああ その頃南風の行水に夢を戀してゐた燕も、

孵卵器の溫度を赤道圏に移されて、

熱帯の遊び人も、もつと大氣と水の美くしい、

田舎の鏡を戀して、

強烈な日光をマグネシウムのやうに嫌ひ、

薄い絹の夏羽織の折目正しい盛装で

もう夏衣の白衣の皺を立派にのばして、

日本娘の櫻や、桃の田舎娘の盛宴のまつさかりを、

南國の情熱の高い接吻をする。

ああ あの避雷針のやうに鋭敏な嘴で、

田舎の春を急に初夏の新緑に結ぶのだ。

精兵の騎兵隊の白兵戦が、

黒鐵の刃をぬいて混亂してゐる、

その疾驅する天空から、

自由の彩圖を眼下に見下ろす燕の軌道よ！

私はその天體の清朗を戀し、

毎日毎日日光と衝突する燕の白兵戦を、

はつ夏の色で感謝するのだ。

落日の冬ぞら

午後の陽は西へ二三段、

冬の凍つた日影が物かけから谷からはひ上り、

冬の風光は日没を控えて、

金茶に煙る光線をおもむろに、

泥濘の道、薄光る屋根、斑らに乾いた砂地から、

今引き取つてゐるのだ。

斜に走る光線は、

太陽の岸邊もまぢか、

一日の名残りと雲の市民の時めく光彩とに、
その銀の光輪を皆地上へ逆落し、
天は夕の色が岸に居竝び、
今地球は太陽に無量なまなこを見ひらきながら、
安息に生き足りた感謝を送るのだ。
立木は居竝ぶ使徒か、
立派で健康でそれにも増した讚嘆、
私の懸けて眺める精神の若者たちだ。
立ち竝ぶ家は氷に閉ざされた北洋の港か、
障子を開いた日蔭の家が、
北極の海を走る汽船の窓にうつる冬の家！

さあれ私の今想見する生活の豊富と、
絶対の讚美とは青春の怒濤となつて、
此等の天然の異つた嚴肅と莊重の美に、
この春の力をつけ加へるのだ。
私の今の生活は、
冬の天然に向つて私の力であるものを一として、
力ある生活に參與することだ。
冬とは名ばかり、
私は豊かに、大きく、健康に育つた精神を、
自由に泳がせ、勝手に裸にむくのだ、
そこに自信と我が熱愛を盛る光明のいくたの私の詩、

吹けよ雪かぜ、朝の風！

私は此の冬の獨特であり本然である鑛鐵の響も、

一たん我がものとなれば麗はしく晴れやか。

沁みて來よ北風、朝の水、

これが私の瞳にのまれペンにあたれば、

美しく輝かしい光明の文字となる詩句の星座、

金と銀とをちりばめる千古の心のみづらみともなるのだ。

私は離すまい、距^{はな}たるまい、

私の精神が持ち運んで來る冬のダイヤモンドは、

寒い冬の夜晝のあけくれにも、

いつも山ほど充ち足りてあるほどに。

その素朴で純粹で鑛石のままなるものに、

私の精神の輝きである磨きをかけるに晝夜をつないでもなほ足らぬ故に！

私は何を置いても冬に親しまう、

何を抜きにしても此等の磨きを忘れまい。

力を出し抜き、精神を漲らした上で、

私は靜かに又安らかにお前と枕しよう。

だがそれは今私の遠い夢想！

精神の響と生活の充溢が其處に置かない、

この夢想の花は散り易い、

今花はなくとも葉は茂らすとも、

もつと根本である幹と鐵の素描の枝を張らう。

その千百の喜びの指を伸ばさう、
歡喜と無量の愛に根を立てよう。

おお この冬のしたたる天の青さの下で、
健全の端唄は未前の藝術の蕾となつて、

勇氣ある仕事に讃嘆の花を咲かせるのだ。

私はいま日光の沈む時の前、

この喜びの總量をペンに打ち込んで、

正しく雄雄しく生きた人間の感興を、

壮大に歌ふのだ。

ああ かかるとき私の願ひは永遠！

そして私の生活は己れを空しくし、

實に混然とした此の世に瀰漫する美と力とが、
別個な私を押し立ててしまふのだ。

この青ぞらの下、

鏗然とした氷の楯の上！

私は祝された魂と仕事とを持つて、

實に感謝に充ちた體軀をゆるがすのだ。

此の朝の一時

今日は又何んと言ふ天の思ひ切りだ。

光線の花火はもう朝から天空に無量な累積！

庭の片隅や石垣の出張つた處などは、

新鮮な金澤、みたくに模様替へしてしまひ、

虎の豪華な敷皮か？

豹の斑の毛皮の模様か？

道ばたの落葉樹は金の建築の一部を組立ててゐるやう、

盛福な天意が滾滾と、

波うつやうに擡頭する朝の地上の一時だ。

天の碧さが引き締めた空気の澄澗さ、

花火のやうに散りかかる光線の猛烈さ、

此の朝の日光の満潮する一時こそ、

硬質無比な礫石の燃焼だ。

そして此の素晴らしい光景に頭を没し、

枝を没して金の沐浴につかる立木の素描や、

ダヴィンチ風の深刻の彩描や、

ゴッホのやうに氣骨の張つた朝の快通な時こそ、

私の喜びがこれ等に綱と縫ひ込んで、

今朝の讃歌を充たし、

それに續いて私にせまり来る、

今朝私が楽しい登校の道すがら。

大道を渡うたせ異様なカーブの伴奏をする、

鳶色の劃然とした道の兩側の短草の堵列は、

田圃の氣魄を打ち込んだ詩の精髓だ。

そして私の憂憂の下駄の音は、

歡喜の魂の快調音！

おお、そしてその片側を筆のやうに流れる小川は、

永遠な節奏の一大序曲だ。

道はほとんど平坦、

後と前さききに行く生徒は元氣、

兩翼の田圃は黄金の張り、

喜びの眼を誘ふ二條の電線の彼方は、

おお、とんでもない琥珀の青ぞら。

そしてばうばうと立ち上る、

露の衣替へする稲田の畦は、

おお、とんでもない大きな鳥が、

今朝の瑞瑞しい莊麗な田圃に降りて、

濡れた翼をひろげたやうだ。

健康な酸素は濃やかに生ひかぶさり、

どこを見てもむつちりした黄金の多量！

人生の高邁な氣力は、

天然の豊饒に喊聲をはり上げ、

快活な雀は、

村落のリボンである二三條の電線に、

今朝の空氣のスタートを切り、

尻尾をかぶつて勢ひあまり、

投げられたやうにはあつと飛び立つ。

おお こんなに楽しく續く生涯を、

枝を張りつめた青葉の立木のやうに、

さあざあと感ずる田舎の朝を、

今朝のやうに完美に自然に力づよく、

實に熱烈な魂の内奥に、

打ち込むことの出来る田舎の詩人！

冬の聲

冬の眞ひる、

空に擴がる雲は一つとして平和に穩やかなものはない、みんな、散りぢりの固摯の意志を持つたもののやうに、突き合ひ離れ散り鋭利な神經に間を裂きながら、温く悠るやかに抱擁してゐるのは、何處を見てもない。

敵視か或はそれぞれが勝手な横暴か、

みなそれ等が親密な精神を缺いてゐるやうだ。

けれどもあのまつ青な空の下を、

航走してゐるのは何んと言つても美しい。

空にまで突き上げはしまひかと思はれる木枯は、

今冬の自然を遠巻きに圍んでゐるのか、

毎日毎日遠い空と地平線のあたりに騒いでゐる、

空は高く雲を下に掃き下だし、

あの琥珀の立派な空の近くには、

雲の峰は近づかない。

そして雲は低く、更に低く、

その氷の翼をおろし、

萬物の上に現實の理想を果すのだ。

風は北斗を嚙んでオロラの悲愁を唄ひ、

もはや地球は北極に生活をゆだねたのだ。

かくて天然は狂暴な旗を吹きひろげ、

凡ての情趣より優美な感情を奪ひ、

痛切な動亂の異域と化し、

我等の生活はただ無窮の空にしたたる憧憬を、

注ぐのだ。

日は西！

冬の寒氣と情熱は急に西日をかたむかし、

磨かれた空は圓く大きく何時果てるとも知らない風は、

ソロモンの悲哀を含んで、

重複する春と冬とのロンドを歌ひ去る。

夕暮

美しく晴れた日の夕暮、

私は自轉車を飛ばせて學校から家へ歸る。

私は活動するとき常に歡喜を覺える、

羽織の袖や袴の裾が風にあふられて、

獨り悦に入つて疾走してゐる私を、

大勢のものが歡乎して聲援してゐて呉れるやうだ。

行く先に一人も人は來ない、

私は下り坂を實に安全な氣持で全速度で走る。

川向うの田園で子供が頻りに呼ぶ、

實に充實した熱聲で應答を求め。

まるで遠い星か月でも呼ぶときのやうに、

不思議な力を野天にひびかせて呼ぶ、

その聲が廣い地域に亘つてゐるが、

實に凝集した砲彈のやうに私に向つて放たれてゐるのが明瞭にききとれる。

自轉車が早いので子供は向う側の堤を走りながら、

私を家路に歸る小鳥でも追ひかけるやうに、

遠くから私の名を呼んでゐる。

名残を惜しむやうに、又聞きたい話でもあるときのやうに、

切實に、勇敢に私の耳に突喊して來る。

私はハンドルをしつかり握つて、

自轉車をゆつくりさせる。

まるで列車の除行區域（じりく）にあるときのやうに、

私は子供の方へ顔を向けて答へる。

「先生——」

「あ——」

「おやすみな——」

おお 有難い、自分は思はず涙ぐむ。

ああ 夕暮靜かに夜が來る前、

私の夜の關門はなんと壯麗なものだらう。

晝に優つて私の夜は喜ばしう。

私の仕事は夜も晝も區別はない。

出來るとき、洪水のやうに湧き立つとき、

私は全身の汗線を空間に開け、

情熱の深い鍛錬と歡喜の肌をむつくり脱ぎ、

砲彈の様にあらゆる美に、愛情に向つて、

方向を、指針を据ゑるのだ。

高い川音を渡つて來る三四人の子供の聲よ、

自分を出征する軍人のやうに、

彼等に血涙を送つて又道を急ぐのだ。

「おやすみな」

「先生おやすみな」

「お——、又明日な——」

私はもう悲壯な歡喜に身體が沸瀝し、

實に人生の曠野を突進する氣慨と信念とをつかみ、

夕暮の家路へ凱旋するのだ。

あのやさしい田舎の電燈の無数の灯火が迎へる、

田舎の我家へ歸るのだ。

千萬の喜びの羽ばたきを背負つて、

重大な魂の萬雷の火花を感じて、

私は私の仕事のため我家のアトリエに急ぐのだ。

無題

仲好く暮したいと思ふ。

自分のためだけなら榮譽も名達も、

得ようと思ひ度く無い。

其のかはり皆んなの喜びになる仕事をしたい。

其處に湧く力にのみ自分は、

自分の仕事の信頼を置く。

負しい力をなほも勵まして、

萬人の幸福のためになら努力したい。

その甲斐を欲し。

其處で喜べる喜びなら、

人に先だつて誇りたい擴めたい、

一寸も恥かしくない。

自分のためにのみ喜びを呼ぶのは恥だ。

人間は善につくさなければ、

愛を願うでないならば、

寂しいものだ。

愛で勝たう、

善で起たう、

美で戦はう、

若しそれで瘳れるにしても、

私は、

寂しい思ひを人生でしなかつた結果が、

どんなに私を幸福にし、

立派にするだらう。

おお それを思ふと一刻も早く善につかふ、

愛につかう、

そして美につかう、

人に善が送りたい。

愛を送りたい、

そしてそれ等を一括した人間の美を示したい。

この思ひが胸に一ぱいになる。

眞面目にならう。

勉強しよう。

中途半端で何が出来よう。

おつー

新大陸圖

清朗な日と平和な南風に空色の帆を揚げ、
水に浮く船體を赤楊色に染め明るい情熱の帯を締め、
新緑の港を圍む後ろの村落に草色の汽笛を響かせ、
鳴り渡る汽鐘の轟きを水深く躍らせ、
その島のやうな鋼鐵の船體を精密に鱗ほひ、
新鮮なオゾンと胸に擴がる雄圖を持つたその、
新緑の子情熱の船乗りが赤銅の双膚をおし脱ぎ、
靜穩と愛讃の國巨大な大陸の夢想に揺られて、

海神の守る夢を感じながら靜かな發錨をする、
田舎の航海船が新大陸の發見に發つ、今、
此處は私の新緑を戀する港灣の新彩圖!!

船首に起つて新緑の森の映る水底、
その明るい水盤の港をすべる巨大な船舶の上で、
水と樹木の抱擁の鮮やかなところ、
大氣と樹葉の接吻の忙がしいところ、
その水郷の色彩も次第に船尾の旗にかくれるまで、
船乗りは火も妻も文字も忘れて金銅の思ひを以つ、
やがて船乗りは整然とした進路を取り、

汽鐘の高調音に孤獨の進運を蘇がへらせ、
夢想の房房を靜穩な波の上で文字に生かし、
秀壯な航海圖を日日詩囊に潜めるのだ、
船は今紺青の水深をすべつて南航する、
船首に飛沫を揚げる波束は海洋の美しい花花、
その旗旛のやうに吹き流す青いうねりの脈搏ちは、
微笑と歡喜の握手する海心の胸の早鐘の發情！
船乗りはより確かなより無際涯な大膽さが、
勇邁と緊密のさしまねく熱情となつて、
あらゆる仕事の上、颯爽たる人生の進路の上に、
このゆるぎなき海洋の精神と合體させるのだ、

常に安息と休止の許されない躍進又躍進、
更に杳か遠くの水平線から水平線まで、
一瞬のまたたき、一步の停滯を突き進んで、
より強剛な船首を無窮の水路に向けるのだ！
そこは永遠の若さが無爲の時を突き崩し、
日光のやうに海洋の多彩の精神が躍るところ、
沸瀝する地球の水半球、
永遠の愛と不變の熱情が放膽な精神の、
造營に無終の時を費してゐるところ、
おお 日輪の光を此處に、水天の眼路をさかひに、
嘖嘖と暗れ渡つて行く天啓の船乗りの息！

時しも彼方、草木は蒼金の島をなし、
雲低く木立に濡れて青むあたり、
とある此處は南國の島である、

このとき船乗りは、はじめて渴仰に打たれて眠醒め、
胸は明瞭に、暢び上り崇嚴な額を向ける、
濃緑の熱帯植物、深紅の果實、奇怪な動物が、
極彩色の熱帯園を構成してゐるところ、

陸は陰影と反射の印度更紗、

そして植物のやうに多彩な島の種族、

船は勇敢に熱帯の色濃まやなとある入江に、

その島へ奇怪な電信を送るかのやう、

厚い日光の腹帯をゆすつて島に鳴り渡る汽笛を鳴らす、
やがて動物色の島の小供は、

珍奇な海龜や、海草の帯や、魚具の玩具や、

肉厚の唇を動かし、頑健な偉丈夫の肩を聳やかし、

蟻のやうに船に近よつて来る、

船乗りは故國を忘れ危険を忘れて、

その連日の潮に染まつた鍛鐵のやうな偉軀を、

そのゆらぐ船を岸邊に置き去りしたまま

快然と新陸地へ磁石のやうな足を踏み入れるのだ、

饒舌の島人等、又不可思議な動物の幻燈會、

凡べて暴虐と、掠奪と、殺伐は炎天の露ほどもなく、
嘗つてありし事も想像するに難く、

歡待と珍聞に富み、從順と温和に生き、

清純な本性と、純一な愛顧が生れ、

船乗りは强健な體を撫して島人に圍まれて立つ、

笛と、弓と、壺を唯一の友とし、

婦も、娘も果實のやうに明け放ちにし、

情熱の島、純心な住人が、

船乗りの心臓の血を新しく湧き立たせ、

彼等の合圖を烽火のやうに感じ、

彼等の瞳を太古の幻のやうに覗ひ見、

その衣服と、冠のさんらんとした藝術を見、

卒直な氣風と、合同の精神の詩をかんじ、

船乗りは彼等の圍饒の中、愛護の包圍の中に、

海洋の精神と、島國の生活とを結びつけるのだ、

鬱蒼と茂る植物の森かけをとほし、

無窮の空が崇高な山嶽のやうに聳える、

その天空の信仰と、海洋の掟と、晴天の安泰に、

彼等の一日は、又一生は托されてあるのだ、

その房房の果の熟す美林と、

紺碧の中から釣られる鮮魚の幾匹と、

愛撫と、純雅に仕へる清らかな妻と、

勞苦と、人生を知らない太陽色の娘や子供とが、
彼等の一日の感謝、一生の讃嘆であるのだ、
船乗りはゆるゆるとその足を運ぶ、
彼等は案内と、深切の瞳を向けて、
船乗りを、より確かな、より清らかな、
より美しい彼等の歡待の場所へ導く、
黄道のやうな光の美しい小徑、
そこに南國の地がらんばつの草叢をつくる、
船乗りは森かげと、石の上と、動物の背に、
南國の夢を感じ、詩を探し、情熱を肥やす、
やがて粗末な草の家、青緑の城へ、

その彼等の棲家へ、微笑んで案内する、
萬古の謎をうつ主人の扉をたたくままに、
妻は微笑して夫を迎へ入れる、
強剛な未開人の偉いなる體が
安眠と愛情を惜しげもなく漲らす唯一の家なのだ、
主人は船乗りを手眞似してこまねく、
船乗りは立派な器と、汗液の美酒と、獸肉の鍋に、
熱帯の饗應を思ふさま享け、
惜別と落涙のこまやかな別れを告げる、
夫も妻も娘も、東洋の海洋精神の美しい若者を
慟哭して見送るのだ、

やがて船乗りは勇躍して山河を跋渉し、
小供の無爲遊樂の巷に詩をさがし、
女の情熱を硫黄のやうに鋭く感じ、
幾日かを過ごすのだ、

おお 健康と、情熱と、晴天の島！

船乗りは更に更に新大陸發見の意圖を擴充する。

碧い島と別れ、赤い色彩を後に

船は更に艤装を整へ、新炭を供給して、
此の入江を出帆する、

巨大な太陽と、安全な船路がこの後幾日も續く、

羅針を確かめ、船體を繕つて、

船はなほ南へ南へと航行する、

新色彩圖と、新人種と、新精神の横溢する、

巨大な國新大陸の發見に船乗りの心は躍る、

正しい蠻力に燃えて、強烈な海洋に護られて、

獨り笑つたり興奮したりして、

自分の求める詩の種族、魂の生物のゐる、

新大陸の美しい部落へ、

赤銅の太陽色の皮膚をもつて、

恐ろしい熱望の足音をさせて航行する、

ああ 新鮮な氣稜、太古の魔宮、

その水半球の彼方、實に激潮とした勢をもつて、
船乗りは天然愛と人類愛の交叉して繁り合ひ、
文化と、生活の美林の下に清く湧く、
南國の島、新大陸を求めろのだ、
畢生の努力を傾倒して、
實に博大な情熱に燃えたつのだ!!

四月の花

寒くて貧しい冬の浮浪人をやつてしまひ、
春の海軟風に乗つて來る春風の、
若若しい漂流者の救助網となつて、
早春の天に投網なまなまを張つた櫻の木木よ！
筋骨と精神の逞ましい海洋誕生者の、
日本娘の櫻や、季節の花花や、昆蟲や、野菜や、
それ等を戀する海洋精神の渴仰者の、
島の百姓女や、男たちの情緒に、

大氣の色をつけたたくさんの花化となつて、

四月の田舎を清麗な色で奪つてしまふ、

ああ その果臬とした花の沸瀝する田舎の色彩圖！
その情熱の高壓線が

若い男や女の心を掠奪するやうに、

異様な起電機の翼となつて若者の心を流れる、

おお 豪雨のやうな花の誘惑よ！

ああ 天然生活の扮飾よ、

地球の表は春の正午に廻轉し、

四月の花は地液から大氣の生活に流れ込む。

星 空

降るやうな十一月の宵空の星、

今夜こそ誰れも臆せず思案せず一望の高い空に、

勢揃ひした數千の星座の賑やかさ美しさ！

もう此れでみんなありつたけ、

此れ以上つめたら溢れて下に落ちるのが出來さう、

星の仲間に破天荒の幸福事でも持ち上つたのか、

老若男女の入り亂れた美しさ

どんな珍らしいお祝ひなのだらう、

どんな厳肅な儀式が取り行はれ 居るのだらう、
皆んな揃つてその盛宴には招れたらしく、
幸福の座につめ切つた一國のおさむらひたち。

夜更けて來ればもつと増えるだらう、

けれど今が一番賑やかで美しい、

幸福のあるじはなにか、

皆んなが誰れかを待つてゐるやう、

花嫁のお輿こし入れでも約束されてゐるのか、

立派な晴れやかな顔をして、

天の門前で歌つてゐるやう、

しつかりとした幸福が私を無上に喜ばせる、
そして私の名さす星！

琴、鷲、牧夫、牝牛、オリオン、

ペルシウス、カシオペア、アンタレス、

アルデバラン、壯大なアンドロメダ！

可憐な三角、牡羊、等の美しい星たちが、

轡うしろを揃へた凜とした白明の空！

何一點のこだはりもなく、

天頂をゆるやかに跨いでゐる、

お隣同志肩もすれすれに少しづつ組になつて、

瞳を輝かせながら、

處女のやうな誇りと優雅さに充たされた、
氣高い動作が目に見えるやう、

そして美しい言葉が何處からか漏れて來さう、
此の十月の澄み切つた夜空のお前たち！

おお そんなに嬉しく待つてゐるのはなんだらう、
私も一緒に此處で待つて居よう、

けれどお前たちはみんな私より若さうだ、

其の美しさ輝かしさには、

到底も私は叶はないのだ、

おお 星よ、

お前たちの待つものがたとへ何んであらうと、

私は只お前たちが羨ましいのだ、
お前たちの健全な幸福が、
ちつと、

かうして立つてゐる私の肩をたくやうに思ふ、

お前たちの幸福を胸に抱いて、

ちつと見惚れる私の喜悅の横溢！

耳をすませば、

どつと言ふ賑やかなどよめきが聞えはしまいかと、

とんでもない私の今夜の夢想！

比類なき喜びの戦きが、

砂金のやうに私のうちに輝き出す、

この數萬燭光の夜空の野天で、
私はペンを取つて立つ術を鍛へる、
おお この星こそ、
私の生涯を貫く壯麗なうたのリボンである。

蒲公英

大きいのも小さいのもみんな眼をあいて、
喜んで早春の天の眼を映してゐる蒲公英よ！
大古の里人のやうに太陽色に染つた女が、
澤山の春光を戀する明るい瞳の、
極色の出しやばりな日光の許嫁の娘を抱へて、
高い天を心と身體の主として、
心狂ひのない朝と晝と夕方^{たふし}の生活をして、
田舎の女子供と一緒に幸福を求めぬ。

日輪形の僻地の娘よ！

不仕合せな田舎娘や、孤獨の若者や、

日光や、大氣や、草花の精靈の記者たちに、

春の花壇の開花期をま晝のやうに待たせたり、

満月のやうに心を生き生きとさせて、

太陽の遠心力を感じさせ、

滅多に失戀の亡靈を立たせることなく、

田舎籠りの日曜日の男女を、

すつかり野の小徑に誘ひ出し、

小太陽の美装してゐる青い草原で、

日光と感覺の新しい會話を交し、

大氣の色眼鏡をかけて草原を有色の種族とする、

田舎の散歩者は黄色の虻だ！

あの健康な大氣の着物を着て、

電氣工夫のやうに明るい蒲公英の街を、

浮浪する私は、

田舎を捨てて何處の新開地へ移轉しようとするのだ！

雪の空

十一月の精悍な寒風を沈黙させ、

突如として今朝白雪の洗禮を降らす天體の微塵！

宇宙塵の埋葬を布告し、

禮讚を降らす雪景色の陸離とした眺め、

天の光の飛沫の花が

寒冷な朔風に裂かれ、

忽ねんと見舞うた地上の思はぬ花びら！

天は一體に模糊として白鳥の重い翼を張り、

其の翼の柔毛が神祕にゆすられて、

沸騰する勢で地上へまつしぐら、

この厚い白い膜のかけで、

無数の白鳥がはばたいてゐるやうだ、

總べての風趣から、

狭少と耽美と不潔を拂ひ退け、

今や現實の詩化された微塵を轟かす、

冬の相貌！

美しい人間の深奥な思想を連ねたやうな、

高邁な氣魄と、

集散する人情の機微で織つた、
アテナの神の織物のやうな、
雪の分封した美しさ、
降り積んだ頑丈さ、
これこそ秋の末期より、
冬にかけて天然の深い推移を、
總括した美しさだと思ふ。

悠然とした精神と鮮やかな勇躍を、
天に向つても地に走つても、
嚴と與へて呉れるお前冬の華華よ。

あの夕夜まで鮭いろの夕焼を流してゐた優しい空が、
わけても私の讚美を映して呉れた空が、
何に驚いたのか、
かくも多量で而かも宇宙的の花瓣の雨を、
額に光らせたものかと嘔然とする、
そして荒野の舞踏に、
緻密な精神と落着いた仕事への祝福を送るのだ、
お前冬！
今自分の面して立つ冬の第一線に、
絶叫して人類の檻を解かう。

「冬よ、お前こそ感潮の敵、正義の兜！

厳正な試練を祝祭するアドラスの騎士！

勇武ある生命の鼓舞者！

磨ぎすました雋烈な魂の喚發者！

思想の雨！

お前冬よ！

雪よ、嵐よ、吹雪よ、結氷よ、大道よ、濠端よ、
樹木よ！

再び此等に喚發の愉樂を與へしめよ、

それこそお前の博大な叡智と使命なのだ」

十一月の嵐は荒廢の歌、

地上の華の立木の數數の、

檻穽をはぎとる悲痛な使命！

なほも其處に幸福の思ひがあるならば、

椋鳥の嵐のやうに飛び立つ元氣さをだ、

樅の立木にもぐる小鳥の美しさをだ、

そして

私のびくともしない元氣さをだ。

朝の訪れ

今朝の空、

圓く大きく琥珀いろの美しい空、

何んと絶好な秀麗さだ、

天の本質が深遠に輝き切つた十月半ばの空、

どうしてこんなにも美しい空が、

續くものかと驚ろいてしまふ、

私は戸外に出る、

今朝の自然に全たき愛の挨拶をする、

家をめぐる木立の網に、

滅多に來ない山雀、小雀、百舌鳥、それに田舎の雀、

その山家育ちの精悍な臆ばかりのやうな奴が、

今朝連れ立つて來た田舎のわが家！

こんな伽藍洞な大きな建物の窓ぎはまで、

遙遙お越しのお前瑠璃の喜び！

今日はお天気なので皆んなで遠足か、

それとも變つたお馳走を探しにか、

何にはあれ、

私はお前たちの健全な歌に泣かされるのだ、

剛健な思ひや熱氣の願ひが、

お前たちの歌にほぐされて、

あの青ぞらに溶け込んでしまふのだ、

可愛い奴、

無口な奴、

お轉婆の娘、

むくむく太つた石のやうに固い奴、

バチクチ廻る寶石の腫！

電気で作用するやうに外敵に對する不思議な働き、

落ち付きはないがそれでも楽しんでゐるさま、

その溢れる幸福に私は息がつかない程だ、

水浴びでもしてゐるやう、

金茶やときいろの翼が陽にくだける、

立派な尾の上げ下げを視てゐると、

思はず快哉を叫んで吹き出してしまふ、

軽い船を棹で漕いでゐるやう、

背負ひ切れない幸福をふりまいてゐるやう、

あたりがお前の無垢の歌で溢れてしまふ、

珍らしく今朝寒いのにな早く来て、

私に今日の健康な仕事の門出に、

幸を投げて呉れたお前ほどに、

何か俺らしいお禮がしたいと思ふぞ！

未だ今日はほんの初對面の近づきをしたばかり、

來馴れたこれからは毎日お出で、

私はあの小學讀本の「お花さん」のやうに、

毎日窓を明けて待つてゐるほどに！

今日はお前たちの好きな餌もやれない始末、

せめて庭にこぼれてゐる糞でも拾つて行つて呉れ、

だがそんなことは一寸も考へてゐないらしい、

無縫の歌が空に縫ひ込むやうだ、

おお お前たちお揃ひの元氣もの、

お前の簡素な美しい訪れに、

私は和らぎの魂と、

之の世で美しい立派な詩を、

お前の素ばらしい歌に教はつて、

必度お前に心のお禮をするほどに！！

私の夢をゆすつて呉れ、

私の魂を呼びさましてくれ、

お前小鳥たちよ！

幸福を讚美す

朝まだき、

氷のやうな十一月の空氣を割つて、

快心のヴェルハーランの詩章に魅惑され鼓舞されて、

比重の高い朝のオゾンに浸かりながら、

今朝たのしい私が登校の道すがら。

朝の光を背負ふ東の山は淡紫の煙つた空氣のごとく、

西一帯の山はもうてつべんに金のかけらを連ねたやう、

びかびか光る氣凜の鮮かさ、

今朝の幸福が飲まれてしまひさう、

田舎すまひのかけがへなき眺め。

道はうねりくねり、

坂となつて數町も續く、

思はずはや足、

片側の小川が、

今朝の私の幸福の半分を獨占し、

重みのかかつた空氣をかぶつて典雅な流れ、

四圍の光景は谷に沿つて開けて行く。

突然！

後ろに軽い足音、

ふつと振り向く私の思はぬ笑顔！

何時近づいたのか女の子供、

破天荒に嬉しい拾ひ物でもしたかのやう、

私の顔を見上げて身體をゆすぶる、

「早いな」と精一ばいの私の喜びが割れる。

「お早うございます」今朝山から採つて来た、

折りたての紅葉のやうな兩手を膝に、

丁寧を罩めた可憐なお辭儀！

私はいつもの癖で帽子のふちに手をかける、

この田舎の道で何よりもいちはやく咲く人情の花、

この價貴とき氣品の横溢！

勿體ない氣さへする一點景、

「誰もゐないのでもう學校に遅れたともつて」

純白な息をふつと吐いて心から喜ばし氣な内氣の娘、

私の中からはととも置ききれない喜悅の情、

「よしよし今朝はうんと早いなのだよ一番先き

ご飯はもうお済みか？」

どんな感ちがひをしてこんなに慌てて来たのか？」

「ええ 済んで、直ぐと」

この素晴らしい朝の緊密な自然の中に、
かくも美しく、かくも澄冽と、

人情の機微をきめはた一點景！

「先生と一緒にまあ嬉しいこと」

なんとたまらない無垢の奴だ、

とんでもない安心しやう、

先に立つて犬ころのやうにころころ走る、

靴につるした握飯しすびのかたまりが、

風鈴のやうに小さい子供の中からだを幸福の鏈でたく、

ゆつくりと思つても知らずはや足、

早やすぎたのも氣にも止めず、

喜び溢れた元氣な歩調、

早く學校へ行つて遊びたいのか、

恰好な遊び仲間と早く一緒になりたいたのか、

おお 私の今朝の讚嘆、

幸福の玉は前をころけて澄冽！

ああ こんなにも美しい生の飛躍を、

思ひがけなく恵まれた今朝首途かきでの道すがら、

凜とした仕事の幸と、

喜悅の生涯が體を完美に充たす、

おお この充溢した魂へのおくりものために、

張り切つた仕事で充たす私の美くしい仕事！
おお 今太陽は素晴らしい歩調を取り、
濶然と我等の行く手を光輝で充たす。

大正十三年五月一日印刷
大正十三年五月五日發行

著者 高島茂

東京市小石川區白山御殿町三十二番地
發行者 内藤銀策

東京市小石川區白山御殿町三十二番地
印刷者 内藤銀策

東京市小石川區白山御殿町三十二番地
印刷所 抒情詩社印刷部

東京市小石川區白山御殿町三十二番地
發行所 抒情詩社

振替東京三三三番

◀ 定價全圖五拾錢 ▶

159
5
0

159

2310
R.P.

